

内子

人、地域、歴史
うちこをつなぐ

Uchiko Town in Japan 2010
内子町勢要覧

清らかな小田川の流れ
生命力あふれる森
豊かな実りを生む里

時が流れ、時代が変わっても
この町には大切に受け継がれてきた宝があります

遠い祖先から、わたしたちに贈られた
かけがえのない自然や伝統、そして文化
その一つ一つの宝を
わたしたちの手でさらに輝かせ
未来の子どもたちへ伝えたい

「住んでよし、訪ねてよし、美し内子」
誇れるまちを、次の世代へとつなぐために
内子町の今を、見つめ直します

目次 CONTENTS

巻頭特集

町並みから村並み、そして山並みへ	02
往時の歴史を語る町並み	04
山里の豊かさを伝える村並み	06
悠久の流れがはぐくんだ山並み	08

第 1 章

まちの輝きを生む人たち	10
ぶらりうちこ	
・・・うちこツーリズムを訪ねて	22

第 2 章

町並み保存の歩み そしてこれから	24
ぶらりうちこ	
・・・心のふるさと・小田川に行く	32

第 3 章

未来へ	34
ぶらりうちこ	
・・・内子フレッシュパークからリ	44

第 4 章

結の集落をみつめて	46
-----------	----

内子町の未来を描くシナリオ

「内子町総合計画」	52
-----------	----

未来へつなぐまちづくりのために

内子町長 稲本 隆壽	54
------------	----

資 料 編





内子町の東側、久万高原町との境にある大川嶺から、重なり合う山並みと、小田川沿いに広がる町並みを見渡す。左奥に見えるのはソルファオダスキーゲレンデ

豊かな自然、歴史ある建物、伝統の技、多種多様な農林産物、受け継がれた知恵、斬新なアイディア、そして温かい人情——。

内子町は数多くの資源に恵まれています。これらは、降り注ぐ太陽と豊潤な大地、清らかな水がもたらす美しい自然環境の中で、先人が汗を流して築き、守り続けてきた財産です。

歴史ある町並みの保存運動は、地域の歴史、自然、生活文化を守り育てると同時に、農山村の豊かさを見直すきっかけとなりました。新たな価値観を生んだ村並みの美しさは、それを取り巻く森や山林の保全・活用の重要性を語りかけています。

受け継ぎ、守り、そしてそこから新たに生み出していく——。わたしたちはその流れを次代へとつないでいかなければなりません。

巻頭特集では、それら資源の魅力を、季節の彩りと共に写真でつづります。

❖ 巻頭特集 ❖ 写真でつづる内子町の彩り

町並みから村並み、そして山並みへ

昔からあるもの、受け継いだもの、守り続けたもの、生み出したもの、その輝きを切り撮る

04 - 05 往時の歴史を物語る町並み

06 - 07 山里の豊かさを伝える村並み

08 - 09 悠久の流れがはぐくんだ山並み

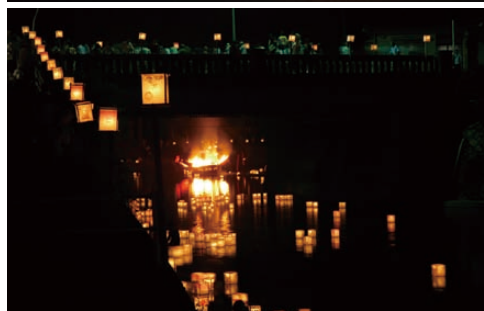


1

3 内子町の夏を活気づける祭りのにぎわい

1_ 8月6～8日に開かれる内子笹祭り。本町商店街を中心に、趣向を凝らした手作りの笹飾り約70本が並び、7日には笹踊りで盛り上げる
2_ 7月の最終土曜日に開かれる小田燈籠まつり。平家の落人伝説にちなみ、手書きの絵燈籠や太鼓台などが小田商店街を練り歩く 3_ 読経が響く中、1,000個を超える燈籠が小田川を流れる様は、まさに幽玄の世界

2



3



1



2



3

2 先人の心意気が たくさんの人の心をつかむ

1_大正5年建造の木造の芝居小屋「内子座」。取り壊しの話も出たが、町民らの熱意で昭和60年に復元 2,3_文楽定期公演をはじめ各種催しに利用されている 4,5_400年の歴史を誇る「いかざき大風合戦」は毎年5月5日に開催



4

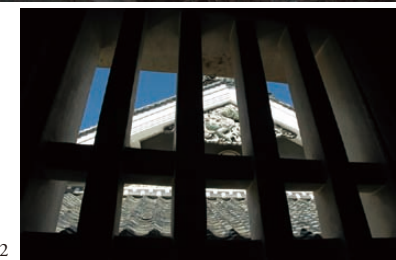


5



1 歴史を語るとともに ものの価値を問いかける

1_「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されている八日市・護国の町並み。右は平成18年に修理工を終えた本芳我家(国の重要文化財) 2_同家の蔵の虫籠窓から見た母屋の鏝絵 3_木蠟資料館上芳我邸(国の重要文化財)。木蠟生産で栄えた芳我家の歴史を伝える施設として開放されている(有料) 4_同地区で最も古い民家の一つ、大村家(国の重要文化財) 5_軒先には家庭でとれた季節の農作物などが並ぶ



2



1



4



5

往時の歴史を物語る町並み

人々の心意気とにぎわいを今につなぐ

山里の豊かさを伝える村並み

四季の移ろいや旬の味覚をもたらし



2 山里には季節の「おいしい」がぎっしり

1_ 長い間大切に大切に耕されてきた棚田。現在は季節ごとに町内外から「棚田オーナー」が訪れ、田植えや稲刈りなどの農作業を体験。そして食べ物の本当の価値を知る 2_ 果物の宝庫でもある内子町。夏から冬にかけて桃、ブドウ、ナシ、柿、クリなどが豊かに実る。地元素材を使ったそばやうどん、石窯で焼いたピザなども楽しめる



3 昔からあるものを守り伝え、今に生かす

1_ 川登地区の「川まつり・筏流し」。かつて盛んだった筏による木材の運搬。その技術と光景を残そうと、毎年4月の第4日曜日に開かれている 2_ ため池と昔ながらの民家が残る尾首地区。のどかな風景の中で桜まつりや観月会(2)が催される 3,4_ 地域住民によって守り続けられてきた、豊秋河原の榎木(3)と石畳地区の東のしだれ桜(4) 5_ 麓川の論田地区にある西井出堰(国の有形民俗文化財)。堰は人々の生活と密に関わってきた 6,7_ 郷愁を誘う屋根付き橋のある風景。河内地区の田丸橋(6)と石畳地区の弓削神社(7)



1 ふるさとの良さを再確認し、自分たちの手で輝かせる

1_ 水車小屋の屋根の葺き替え作業を行う石畳地区の人々。平成2年、12人の地元有志が結成した「石畳を思う会」が、かつて地域にあった水車小屋を自分たちの手で復元。今では、同地区の地域づくりのシンボルに。毎年11月3日には水車まつりが開かれ、1,000人を超える人々が集まる 2_ 春には古木・東のしだれ桜の下で、桜まつりも開催。自慢の手打ちそばで来訪者をもてなす

3 山の神をあがめる気持ちは いつしかふるさと思う心に

1_ 毎年8月15日に開かれる寺村地区の夏の風物詩「山の神火祭り」。山の恵み、秋の豊作を祈って灯される約5,000もの献灯が、幻想的な雰囲気を醸し出す。地元地区が輪番で担当し作成する火模様の形は、当日まで明かされない
2_ 献灯のための「かがり火」は子どもたちが山から運ぶ。幼い心に残る祭りの記憶。成長し町を出ても、祭りを楽しみに大勢の人々がふるさとに帰ってくる

1



2



1

2 そびえ立つ巨木は地域住民の精神の表れ

小田地区には推定樹齢1000年以上といわれる巨木がいくつも残されている。それは、かつてまちの発展の源が林業であり、また巨木に対する強い畏敬の念があったことの証 1_ 広瀬神社のケヤキ（県指定天然記念物） 2_ 三島神社の乳出の大イチョウ（同）。この気根の皮を煎じて飲むと乳の出がよくなるという言い伝えから、その名が付いたといわれている



2

悠久の流れがはぐくんだ山並み

自然をあがめる心が神秘的な癒やし空間を生む



2



1

1 尊い大自然の恩恵にあずかる

1_ 小田深山の奥に広がるブナの原生林 2_ 笠取山から大川嶺へ、稜線を歩く「山並みツアー」。町では自然の豊かさや大切さを知るための催しなどを開催している 3_ 渓谷沿いの遊歩道を歩きながら、のんびり森林浴。心身共に癒される 4_ イベントで用意された弁当は、地元お母さんの手作り 5_ 渓谷では釣りも楽しめる 6,7_ 四季を通じてさまざまな姿を見せる小田深山。自然の神秘に魅せられる



4



3



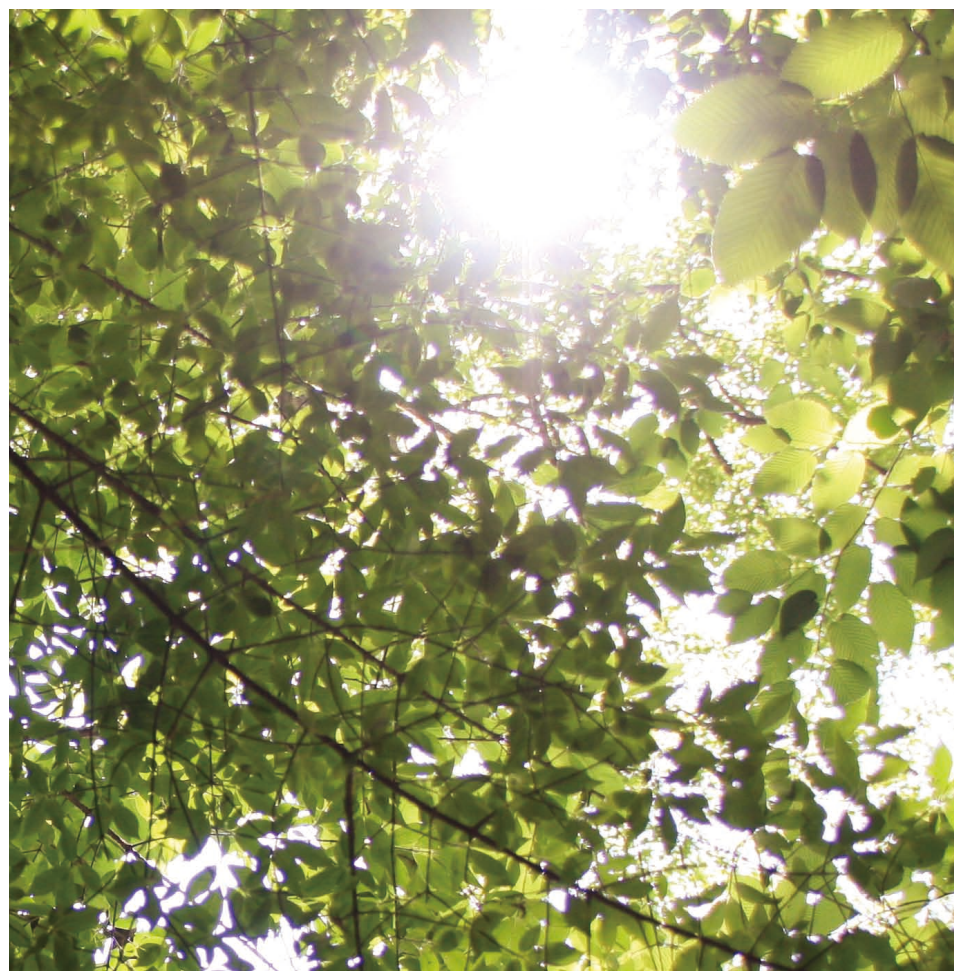
6



5



7



第1章

まちの輝きを生む人たち

広くなった内子町。それぞれの地域に、歴史や文化に彩られた豊かな個性があります。そして、その場所で自分らしく輝きながら生き生きと暮らしている人々がいます。キラリと光る内子町、その輝きの発信源を訪ねて——。

元気な農業、元気な地域づくり

おいしい食べ物と豊かな自然。農業は人が集まる舞台。
地域資源を生かし、交流を通じて、地域を輝かせる

山に囲まれた小さな盆地にある内子町。肥沃な土壌と豊かな水、朝晩の寒暖の差を生かして、さまざまな果樹の栽培が盛んに行われています。

大程久壽男さんもそんな果樹農家の一人。緑深い程内地区の山腹で、妻の幸子さん、長男の寿博さん・奈々絵さん夫妻と共に、主にブドウと柿を生産しています。

「一番大切なのは、消費者を裏切らない生産者であること」と語る久壽男さん。土壌分析や特別栽培認証制度などにも率先して取り組んできました。現在は農協や内子フレッシュパークからりへの出荷のほか、宅配での直接販売も実施。毎年収穫の時期が近づくと、丹精込めて育てた果物を心待ちにしている全国の人たちから注文が届き、「うちの果物を食べた人から直に反応が返ってくるのがうれし

い」と言います。

久壽男さんと幸子さんは、昭和61年に旧内子町で始まった知的農村塾の当初からの塾生。もつとステキな生活ははじめません。のキャッチフレーズに引かれて入塾し、夫婦そろって毎回参加しながら、農村で心身共に豊かに生きる知識や知恵を学んだそうです。また、「女性に優しい内子農業を目指して」をテーマに、農家の女性たちが生き生きと輝く生き方についても考えてきました。

平成3年、旧内子町初の議会推薦で女性農業委員が誕生。その後、平成9年から16年まで幸子さんが同委員を務め、委員会だよりの発行、農地パトロール、研修会の実施など、さまざまな活動に取り組みました。その中で「先輩の応援、夫をはじめ家族の協力、女性仲間や地域の励ましがあったからこそでき

た」と語る幸子さん。「背伸びをせず、肩を張らず、周りの人たちと一緒にあって、自分にできることから始めることの大切さを実感した」と言います。

平成12年からは、県の高齢者活動促進事業がきっかけとなって地域でそば作りが始まりました。その後、こんにゃく芋も栽培されるようになり、地域の女性たちと一緒に「程内こんにゃく芋グループ」を結成。小学生の体験学習や町内外の団体・個人などを受け入れ、こんにゃく作り体験を提供しています。近年は口コミで評判が広まり、体験の申込が増加。「来てくれた人の、ありがたの言葉や笑顔に、みんな元気をもらっている」とうれしそうに話します。

家族はもちろん、地域全体が輝く農村の暮らしを願いながら、大程さん一家は今日も仲良く元気に農業を営んでいます。

家族、そして地域の人々と一緒に農村の暮らしを楽しむ



大程久壽男さん(下段右)、幸子さん(同左)
寿博さん(上段右)、奈々絵さん(同左) =程内=

プロフィール

農業一筋、「生涯現役」と語る久壽男さん。幸子さんはそんな久壽男さんの元に嫁いで30年余り。寿博さんは農業を継ぐ前「若い間だけ好きなことをやりたい」と長距離トラックを運転していた。松山市出身の奈々絵さんは元・出版社勤務。個性豊かで笑顔が絶えない、仲良し家族



⑥内子町の特産品である柿。毎年秋には、内子中学校の生徒たちが訪れ、柿の収穫作業を体験している ⑥時には外国人も訪れるこんにゃく作り体験

農村の暮らしを楽しむ達人

好奇心と行動力を失わない
楽しいことは自分で創り出す

立山地区の山の中、りんご園の隣に建つ丸太作りのログハウス。山本企幸さん・陽子さん夫妻はここでグリーンツーリズムの宿を経営しています。ログハウスは企幸さんの手作り。5年余りかけてほぼ一人で建てました。その後、「来てくれた人に楽しんでもほしい」と、再び手作りで庭先に大きな石窯を設置。採れたて野菜をふんだんに使ったピザやアップルパイ作りは、家族連れなどに大人気となっています。

また「おもしろそうなことは何でもやってみたくなる」と言う企幸さん。平成19年11月に町がどぶろく特区認定されたのを機に、企業組合を設立し本格的などぶろく製造も始めました。「喜んでもらえることが一番うれしい」と話す二人。笑顔に元気をもらって、ますます農園生活を楽しんでいます。



⑭石窯で焼くピザは「宅配よりおいしい」と都会の子にも好評 ⑮20年11月、内子産どぶろくを発売



山本 企幸さん・陽子さん Ⅱ下立山Ⅱ
プロフィール

23歳で地元に戻り、乳牛の飼育やりんご栽培を始めたという企幸さん。公務員だった陽子さんは「退職してものんびりしている暇がない」と笑う

小田深山から魅力を発信

頑張っていれば、人が人を呼んでくれる
小田深山を舞台に交流の和を広げたい

天野 博美さん =立石=

プロフィール

卒業後、保育士として勤務。結婚後は設計士であるご主人の仕事を手伝う。男ばかりの兄弟に囲まれて育ち、「男っぽい性格」とのこと。「思いついたら即実行」と、いつも新しいことにチャレンジしている



四季を通じ美しい風景が広がる小田深山溪谷。天野博美さんは、そこで「深山荘」を営んでいます。元は旧小田町の運営だった深山荘。委託の話を持ちかけられたときは、「この溪谷が庭になると思ったら、すぐに心が決まった」と言います。ご主人の協力もあり、溪流釣り大会の開催、子どもたちの自然体験の受け入れ、グリーンツーリズムや山並み保全活動など、さまざまな取り組みを展開中です。昨年からは県の婚活支援事業にも参加。また愛媛県更生保護会（通称・雄郡寮）の委託を受け、入寮者に毎日の食事を提供しています。さらに、今年度は深山荘で、町内の小学生合同の自然体験合宿も行われる予定。「たくさんのお会いを大切にしながら、一人でも多くの人にこの小田深山の魅力伝えていきたい」と張り切っています。



⑭深山荘では学校合宿も受け入れている。子どもたちが採った山菜は天ぷらに ⑮毎年人気の溪流釣り大会

上岡 ^{みつえ}満榮さん =北浦=

プロフィール

棚田の一番奥に建つ家に暮らす上岡さん。一番大変なのは、日々の水の管理と石垣の草引きとのこと。「人工林が増えたせいか、昔に比べると水がなくなった」と話すが、それでも谷の水が枯れることはない。共に農業を営む奥さん^{じゅんえ}の淳恵さんは「若い人が大勢来てくれるから年を取ってる間がない」とか。



美しい棚田をいつまでも

3軒の農家が守る棚田 オーナーとの交流で地域を活気付ける

大洲市河辺町との境に位置する泉谷地区。標高470[㍎]の狭い山間の急斜面に大小さまざまな95枚の田んぼが並び、平成11年には農林水産省から「日本の棚田百選」に選ばれました。

近年、棚田は米を生産する場所としてだけでなく、保水や山間部の地滑り防止、生態系保全など、多くの機能に注目が集まっています。また、弥生時代から続く水稲耕作の歴史によって形成された水田風景は、日本の文化的原風景ともいわれ、わたしたちに安らぎを与えてくれる空間でもあります。しかし、農村部の過疎化や高齢化の進行などから、その継続が困難になっているのが現状です。

そのような中で、「大切に守られてきた美しい棚田を、次の世代にも引き継いでいこう」と、上岡満榮さんたち同地区の住民

が中心となって「泉谷地区棚田を守る会」を設立。小学生や幼稚園児の農作業体験、自然浴ツアーの開催など、さまざまな取り組みを行ってきました。また現在は、地元の御祓自治会などとも協力しながら活動を進めています。

平成16年からは「棚田オーナー制度」を導入。県内外から15組が参加し、時期に応じて田おこしや田植え、稲刈りなどの農作業を手伝っています。オーナーの皆さんの評判も上々で、「棚田米は本当においしい。その上、自分たちも一緒に育てたと思うと、おいしさが倍増する」とのこと。

上岡さんは「オーナー制度を始めたからといって、普段の農作業が楽になるわけではない」と話します。手作業でしかできない石垣の草引き、あぜ塗り、

田植え後の水の管理など、地元の人たちが毎日行っている作業の負担は大変なもの。「でも、昔は郵便配達の人くらいしか来ることはなかった。今は大勢が来てくれるようになって、この棚田のファンになってくれていて。交流を通じて地域にも活気が出たし、田んぼをきれいにしようという意識も高まった」と活動の手応えを感じています。

平成17年からは、地元住民などの寄付を受け、棚田周辺に毎年100本のシャクナゲを植栽。将来はシャクナゲまつりなどの開催も計画しています。また近年は移住者の受け入れにも積極的に取り組み始めました。

「このままでは地域の後継者がいなくなってしまう。今のうちに行えることは何でもやっておきたい」。穏やかな上岡さんの力強い言葉が印象的です。



⑥オーナー全員が参加しての稲刈り作業。収穫を楽しみに作業もはかどる ⑦毎年開かれる「自然浴ツアー」。景色を眺めながら食べる棚田米のおにぎりは大人気



中谷 ^{のぶひろ}信弘さん（上段左）、^{たか こ}隆子さん（同右）
^{りゅうすけ}竜介さん（下段左）、^{てんぺい}天平さん（同右） =長田=

プロフィール

信弘さんは現在、自治会の運営委員や民生委員を務める。隆子さんは移住者の良き相談役。竜介さんはストリートダンス、天平さんは演劇と、それぞれ地域で活躍中



20年前に大阪から双海町（現伊予市）へ移住し、その後、長田地区へ移り住んだ中谷信弘さん一家。きっかけは愛媛県内で自然農法を実践していた福岡正信^{のぶ}さんの著書『わら一本の革命』との出会いでした。耕さない、除草しない、肥料や農薬を使わない。自然と共に生きることへのあこがれから始めた農ある暮らし。しかし、「当初は農法の違いなどもあり、農地を借りることも難しかった」と言います。

そんな自身の経験から、就農希望者を対象に自宅で体験学校を開き、県の移住サポーターとしても活動するなど、「移住を望む人がすんなり地域に入れる環境づくり」に力を入れている中谷さん。同地区をはじめ山間部の人口減少が進む中で、「地域の活性化のためにも、移住の支援は自分のライフワーク」と語る頼もしい存在です。

「ターンの可能性を広げたい」 都会から移住を望む人と地域との架け橋に



④いつも仲良く農作業を行う信弘さんと隆子さん ⑤都会からの就農希望者に農作業を体験する機会を提供

5月5日、豊秋河原の上空に1,000統を超える凧が舞い上がります。400年以上の歴史を誇る「いかざき大凧合戦」。奥島重利さんは、長年その凧の製作に携わっています。

「五十崎の凧は日本一」と言う奥島さん。「若い時は全国の凧上げ大会に出場して、どこでも一等賞をとったもんよ」と誇らしげに語ります。55歳の時に地元有志18人で「凧の会」を設立。愛媛県で開かれた「第1回国民文化祭」では、仲間と共に30畳の大凧揚げを見事に成功させ、名声を一層高めました。

残念ながらその後、同会は解散。しかし数人の会員が、現在も凧作りを行っています。そして奥島さん自身も、製作の傍ら子どもたちに凧作りを指導するなど、「伝統の凧をより良いものにして次の世代に伝えたい」と伝承の努力を続けています。

奥島 ^{しげとし}重利さん =上町=

プロフィール

小学2年生のとき、お父さんがナイフを買ってくれたことがうれしくて、いろいろなものを手作りしていた。昔から手先の仕事は好きだったそう。「もう歳じゃけんあ」と言いながら、80歳を迎えた今も、年に約1,000統の凧を作る



④ 5月5日、大空に奥島さんが作った出世凧が舞い上がる ⑤今では書ける人も少なくなった凧文字

地域に残る
凧文化を伝える
伝統の凧を次の世代に
自分が持つ技術は進んで分け与えたい

明日のエコでは遅すぎる。具体的な行動を、今。

高本 ^{しすお}師津雄さん =寺成=

プロフィール

NPO法人ODAの木協会代表。小田深山の大自然を舞台に「共に学ぶ」をモットーとして、楽しみながら学ぶ活動を展開。人と生き物すべての出会いの中から、一つの生き物として何ができ、何をすべきかを真摯に考える。天気の良い日は、ほぼ毎日山に登っているという健脚の持ち主



森と共に生きていく

山の健康は環境保全の基本

内子町の山を、どう守り、どう活用していくかが重要

「町並みから村並み、そして山並みへ」をキャッチフレーズに掲げまちづくりを進める内子町。その山並みのシンボルとなっているのが小田深山です。

小田深山は雨乞山、笠取山、大川嶺など、四国山地の標高1,200～1,300メートル級の山々に囲まれています。また四季折々に美しい顔を見せる深い渓谷は、多様な生態系を育む、貴重な自然の宝庫です。高本師津雄さんは、その小田深山を主なフィールドとして、森を守る活動に取り組んでいます。

高本さんの活動の母体となっているのはNPO法人「ODAの木協会」です。もともとは平成5年、旧小田町の地域おこし人材育成プロジェクトとしてスタートし、9年に任意団体として同協会を発足。その後、16年にNPO法人を取得しました。

高本さんは環境教育事業部長として当初から参加。廃校となった小田深山小中学校校舎を活用して環境教育スクール「ODAの木自然学校」を開き、夏休み長期自然体験村をはじめ、小田深山の四季を生かした自然教室・クラフト講座、人材育成（森の案内人養成講座）、出張フォレストスクールなどの活動を行っています。

また近年、林業の不振などから手入れの行き届かない放置林が増え、大雨による鉄砲水や土砂流出などの災害が心配される中、「環境政策の面から山を見直すことが必要」と訴え、放置林の手入れと自然林の再生を目指して、個人でも兼業でも取り組める自伐林家の育成にも力を入れています。

「森が水を蓄え、水に栄養を与えて、川から海へと流れる。

山が健康で豊かであれば、川も海も健康で豊かになる。基本は山の保全」と考える高本さん。「山の保全は、関わろうと思えば誰にでもできること。人ごとだと思わず、自ら関心を持って山と身近になってほしい」と語ります。

内子町が21年度から本格的に取り組んでいる、小田深山を中心とした山の保全と活用を進めるための「せんの森プロジェクト」でも、指導者的存在として活動を牽引している高本さん。「明日のエコでは遅すぎる。内子町の森を守るためにどうすればいいのか、内子町ならではの森づくり、山づくりを、みんなで考えていきましょう」と呼びかけながら、強い信念を持って、自ら山と関わり続けています。



⑥ 溪谷の石を顔に見立て、自然アートを創作。大人も童心に返る ⑥ 小田深山の奥に広がるブナ林を散策しながら自然観察。「森の案内人」として活動する高本さん





ぶらり
うちこ

「お帰り」の声が聞こえます うちこツーリズムを訪ねて

左から高藤^{ひさこ}久子さん、政岡^{けいこ}敬子さん、瀬戸^{せと}トモ子さん。いずれも宿を運営する「さくらの会」メンバー。政岡さんは「宿のおかげで多くの人と出会い、地域の良さを再発見できた」と言う



いしだたみ 石畳の宿

石畳地区の古い民家を移築した体験宿泊施設。のどかな風景にたたずむこの宿の魅力は、囲炉裏や廻り縁のある座敷、屋根裏を改修した客室など、昔の田舎家の雰囲気を感じることができる。もうひとつは山菜やそばなど内子産食材を使い、地域の伝統献立を生かした手料理の数々とか。調理から接客まで行う地元のお母さんたちとの、素朴なふれあいがあるのもうれしい。故郷への深い愛着が生んだ温かいもてなしの心を、じっくり味わいたいもの。

食事やイベントを楽しむ大広間は、山小屋風の素敵な空間。2階はアートギャラリーになっている



世代を超えて盛り上がる音楽会。気ままに開かれるというイベントは、こんなふうに宿泊客や地域住民も巻き込んでいつも賑やかだ



風情ある外観が目を引く



安らぎに満ちた居間や囲炉裏端は宿泊客の憩いの場となっている



いかざき

地域活性化に寄与した魅力的な経営者として、平成19年度に「農林漁家民宿おかあさん100選」に選ばれた森長さん



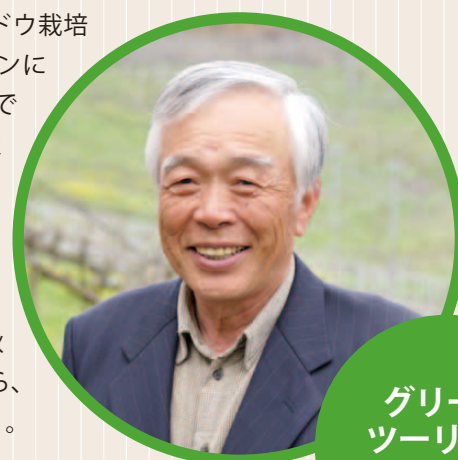
ファーム・イン RAUM 古久里来

木立に囲まれたサイロ風建物が印象的なゲストハウス。ここでゆったりとした時間と自家製野菜中心の手料理でもてなすのが、森長^{もりなが}禮子^{れいこ}さん流。また、近くの田畑で農作業体験ができるほか、時折開かれるミニコンサートや朗読会などのイベントでは飛び入り参加もOK。オーナー夫妻と気楽に語らうもよし、反対に何にもせずボーッとすることもよし、というおおらかさが多い「こくりこ」ファンを惹きつけるようだ。

「里山」オーナーの藤淵^{とうしむち}利通^{りつう}さんは、ブドウ栽培50年以上のベテラン。数年前からワインに関心を持ち、地元で自生する山ブドウでワインを造ろうと「果実酒特区」の認定を取得。昨年植樹した30本の木は予想以上の収穫があり、成分分析も上々の数値で、早速今春、ワイン造りを共に楽しむ仲間を全国から募って「内子ワイン夢クラブ」を発足。早ければこの秋にもブドウ踏みを行う予定というから、「内子ワイン」の商品化が待ち遠しい限り。



「ラベルデザインは公募を予定している」というワインボトルの試作品



グリーン ツーリズム 里山

ヨーロッパまで研修に行ったという藤淵さん。「内子ワインを町の新たな特産品に」と意気込む



山ブドウは実るとこんな感じ。今年の収穫も楽しみ



コケ玉や流木を使ったアート製作、まんじゅう、おこわなど伝統加工食品作り、野鳥とのふれあいといった、山里ならではの体験ができる「やまがら」。最近ではワサビの高地栽培や山菜おこわの出張販売にも力を入れているという大久保^{おおくぼ}ヒロミ^{ひろみ}さんは、今年「農林漁家民宿おかあさん100選」に選ばれた。小田地区の魅力を知り尽くしたオーナー直伝のモノ作りや体験には、訪れる人の毎日を豊かにするヒントがいっぱいあるに違いない。

グリーン ツーリズムの宿 やまがら



「山に入るとほっとする」と大久保さん。30年以上前から趣味のカメラで小田の自然を撮り続けてきた



拾った流木や山草を利用したアート作品



山菜おこわの体験調理を指導中

町並み保存の歩み そしてこれから

今や「まちづくり先進地」として全国的に名を知られるようになった内子町。その出発点となったのは、昭和50年ごろから始まった八日市護国地区の町並み保存運動でした。30年余りにわたるその歩みの中に、あらためてまちづくりの原点を探るとともに、これからの町並み保存を考えます。

八日市護国の町並み

八日市護国地区は、肱川の支流である小田川、中山川、麓川の合流地点に開けた旧内子地区の市街地にあり、金比羅参りや四国遍路などの交通の要衝として古くから栄えたところでした。とりわけ江戸後期に製蠟業が発達し、文久年間（1861～1864）に芳我弥左衛門氏が蠟花式箱晒法を発明してからは、良質な白蠟の産地として隆盛を極めたといえます。旧街道沿いの約600軒の通りには、繁栄ぶりを物語る豪壮な蔵屋敷や町家が軒を連ね、当時の面影を今に残しています。

同地区は昭和57年、国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

現在は、国内外から大勢の観光客が訪れる、県内有数の観光地となっています。

町並み保存運動の起り

戦後の日本では、経済成長の中で都市化が進み、各地がそれぞれの地域の個性を失いつつありました。その中で、妻籠をはじめとする国内各地で、「地域の個性や歴史を失わず、都会のまねではない、ここにしかない資源を守ろう」という運動が起り始めます。これを受けて昭和47年、文化庁は「第一次集落町並調査」を実施。ここに八日市護国地区の町並みがリストアップされたことをきっかけとして、内子町の町並み保存運動が本格的にスタートしました。

運動の広がり

昭和50年、朝日新聞社が発行する「アサヒグラフ」に同地区の町並みが掲載され、多くのメディアに取り上げられるようになると、全国の注目を浴びて次第に町並み保存への意識が高まり始めます。一方で住民の間には、「伝統的な造りの町家は暗く、間取りが不便で、現代の生活に合わない」と、改築を願う声も多くありました。

町は、町並み保存の世界的な先進都市であるドイツ・ローテンブルク市の市長を招き、その取り組みに学ぶシンポジウムを開催。勉強会や学習会を開くとともに、プロジェクトチームを設置するなど、積極的に運動を支援してきました。

多様な価値観がある中、地道な運動の積み重ねによって少しずつ広がっていった町並み保存運動。そこに暮らす人々の思いに支えられて、今に続いています。



㊦昭和52年の護国地区の町並み。右側の道は旧・大洲街道
㊧現在の同地区の町並み。住民の理解と協力によって建物の修復、景観整備、電柱の撤去などが行われ、現在は多くの観光客が訪れる



1_昔ながらの重いしとみ戸。野間口勝則さんは毎朝、自宅隣の町家資料館の戸を開けている 2_まだ観光客もなく静かな早朝の町並みで、店先に商品を並べる河野博彌さん 3_町並み保存会の会員が毎月行っている清掃活動。小さな草もこまめに取り除き、タバコの吸い殻も一つ一つ集める



4,6_訪れる人のために、玄関前には花が飾られ、縁側には座布団が敷かれる 5_家の前に色とりどりの花を植え、朝晩手入れに精を出す宮岡チヨ子さん。今はゴミをポイ捨てすることなどもなくなったとか



9_秋の恒例行事となった八日市町並観月会。以前は町が主催していたが、4年前から保存会が主になって開催している。通りには行灯が灯され、琴の演奏や女性会員手作りの月見団子でもてなす 11,12_団子に添える箸袋も女性会員の手製。和紙を折り、千代紙で飾り付け、喜ぶ顔を思い浮かべながら心を込めて作る



7_市兼武志さん・スエ子さん夫妻は、三叉路に建つ家で床屋と左官業を営む。8_鏝絵職人でもある武志さんは、本芳我家当主とも親しく、平成15～18年にかけて行われた大修理の際には鏝絵の修復を担当した 10_修復した鏝絵の一つ。本芳我家の商標「旭鶴」 13_スエ子さんの開く床屋には常連さんが気軽に訪れ、おしゃべりを楽しむ



暮らしの中にある町並み

あたりまえの日常の光景を守る
住民の愛情が町並みをはぐくむ

心地よい昼下がり、町並みを歩くと床几に座ってご近所さんとおしゃべりに花を咲かせる姿を見かけます。元氣良くあいさつしながら通り過ぎる小中学生。自転車カゴに買い物袋を入れ自宅へと急ぐお母さん。やがて通り沿いの家からは夕飯の支度をする音が聞こえ、障子越しに温かな光が通りを照らし始めます。

八日市護国町並みの魅力は、そこにかつての歴史の面影と共に、今の時代を生きる住民たちの普段の暮らしが見えるところにあると言われています。

しかし保存運動のスタートから30年余りを経過した現在、同地区でもその他の地域と同様に住民の過疎・高齢化が進行し、約80軒の住宅のうち4分の1近くが空き家となっています。

また、自分たちの町並みが評価され、有名になったことを喜ぶ反面、観光客の増加によってゴミのポイ捨てやプライバシーの侵害、騒音、生活道路の不便などの問題が増え、不満も生まれ始めました。

「町並みの穏やかさ、素朴さを失わず、住んでいて良かったと思える町並みを子どもや孫に引き継いでいきたい」。住民の多くがそう願い、より良い町並みにしていくための試行錯誤を繰り返し、努力と工夫を積み重ねながら、日々を暮らしています。

守る、楽しむ、伝える—— 町並みの暮らしをつむぐ人々

伝統の和蠟燭を守り続ける 大森 太郎さん(内子9)



現在、町内でただ一人和蠟燭を作っている大森太郎さん。江戸時代に創業した和蠟燭屋の6代目当主として、200年の伝統を守り続けています。

和蠟燭は、ハゼの実から搾った熱い蠟を、竹串に和紙などを巻いて真綿で止めた芯に、何度も何度も塗り重ねて作ります。そのため断面は木の年輪のようになり、大きくて温かみのある炎と、蠟が垂れずに長持ちするという特徴があります。

家業を継いで丸20年になるという大森さん。「始めは5代目の後ろに座り、すべて見よう見まねで覚えた」と言います。今春からは息子さんが戻り、7代目として修行を始めました。「技術は経験と手のひらの感触で身に付けるしかありません」と語る大森さん。次は自らの背中で伝統を伝えます。

誇れる町並みを 未来の子どもたちに



八日市護国町並保存会 会長
神山 美雄さん(内子11)

町並み保存運動の中心を担う「八日市護国町並保存会」。歴史的文化遺産を守りながら、住心地の良い環境をつくり、文化的な暮らしを保全しようと、同地区に住む約80世帯・200人が中心となって昭和61年に結成しました。

4代目会長として、10年間にわたり同会の活動を率いてきた神山美雄さんは「発足当時は反対意識もあり、活動は困難だったと聞きます。しかし今は町並み保存の意識が浸透し、会で毎月行う清掃活動のほかに、各人が日常的に通りを掃除したり、玄関前を美しく整えたりするようになりました。わたしたちは

みんな自分たちの町並みに誇りと愛着を持ち、訪れる人にもその魅力を感じてほしいと思っていますのです」と話します。

5年前からは「住民の高齢化が進む中、より積極的な女性の参加が不可欠」と、女性部を設置。女性ならではのセンスや気づかいを生かして活発な活動が展開されているそうです。

「住民の我慢ばかりが増えたのでは保存運動は続きませんが、子どもたちに自慢の町並みを残すためにも、これからの保存の在り方を考えていかなければ」。そう語る表情には、町並みに暮らす覚悟のようなものが見えました。

暮らしを楽しみ、まちづくりに関わる 芳我 律子さん(内子11)



結婚後、町並みに暮らし始めて14年目になるという芳我律子さん。当初はその歴史も住む人も知らず、町並み保存にも無関心だったと言います。それが周りの人たちに誘われて少しずつ関わっていくうちに、「いつのまにかどっぷり」。今では町並保存会の事務局長を務めると共に、女性部のメンバーとしても活躍しています。

「決して積極的に飛び込んだわけではなく、周囲に巻き込まれただけ」と話す芳我さん。「でも伝建地区に住む以上、町並み保存問題からは逃れられない。だったら嫌々ではなく楽しみながら暮らしたい。巻き込んでくれる人がいて良かった」と言います。「わたしは関わり始めたばかり。大変だけど、周りの人たちと共に目指すものがあるのはうれしい」と笑っていました。

訪れる人に、町並みの魅力を伝える 町並みガイドの会 会長 久保 正憲さん



町並みを訪れる人にボランティアで案内役を務める町並みガイドの会。「少しでも町並みの魅力が伝わるように」と、時代背景や文化的価値などを分かりやすく説明しています。現会長を務める久保正憲さんは、入会のきっかけを「ある時、観光で訪れた人に町並みのことを尋ねられ、何も答えられなかったから」と話します。「せめて自分が住む町のことをお伝えできるように」と始めたガイド。しかしその奥は深く、調べるほどに新たな疑問が生まれて、今も勉強の途中だそうです。

「ただ見ると、少しでも知識を持って見るのでは、受ける印象が大きく変わる。訪れた人に『来て良かった』と思ってもらいたい」。そう願うガイドさんの存在もまた、町並みの魅力の一つとなっています。

町並みを守る技術を残す

先人の知恵と技を生かす環境を

左官職人
矢野比佐司さん(内子11)



国の重要文化財に指定されている本芳我家や上芳我家をはじめ、町並みにある家壁の修復の多くを手掛けてきた

矢野比佐司さん。「時代の流れの中、自分は町並み保存に関わることができ、地域に育ててもらった」と語ります。

「この町並みの魅力は、昔ながらの技術で、見かけだけでない『本物』を保存しているところ」と話す矢野さん。「ここの建物の特徴でもある地元の土を使った浅黄色の漆喰壁など、地域の気候や風土には、当地で取れるものが一番適している。しかし多くの手間や費用が必要となるため、今はそれを望む人は少ない」と言います。「先人が残した貴重な技術を生かすのは環境。効率性や経済性ばかりが優先されるのではなく、本物を残すことの価値に気づき、人々がそれを求め、実行できる環境が必要」と強く訴えています。

修理に関わる自分が 自分の誇りに

株式会社山本建設
技術者
前田 功一さん(福岡)



平成18年に完成した本芳我家住宅修理事業に続き、現在行われている上芳我家住宅修理事業の施工を請け負う(株)山本建設。同事業は20～23年度の予定で進められており、前田功一さんは同社の現場代理人として、第1期の解体作業などを担当しています。

「重要文化財である上芳我家の修理は、元の部材をできるだけ使わなければいけないため、解体に最も気をつかう」と言います。取り外した部材はすべて番号を付け、一つ一つ状態を確認しながら修理。修理できないものは、可能な限り元のものに近づけるように作り直します。「さすがに材も良いものが使っており、柱の接ぎ手なども非常に複雑。すべて手作業で行わなければならないが、その難しさこそが楽しさでもある」と前田さん。「修理に関われたことが自分の誇りになる」と語っていました。

住む人も、訪れる人も 心地よい町並みを目指して



八日市護国伝統的建造物群保存
地区見直し調査委員会 会長
西山 徳明 北海道大学教授

これからの町並み保存を 見直すために

——八日市護国町並み 保存計画見直し調査を実施——

町並保存センターでは、平成20・21年度の2カ年をかけて、八日市護国町並みの保存計画見直し調査を実施しました。

最初の計画ができてからすでに30年近くが過ぎ、人々が活躍する舞台としての町並み景観は美しく整備・保存されてきました。しかしこれらの、2度目、3度目の家屋修理や新築家屋の修景などを通じて、より魅力的な町並みにするにはどうすれば良いか、そしてさらに大切なこと、どうすればこの町並みに住み続けたい、住んでみたいという人々を

増やしていくことができるかが重要な課題として浮かび上がってきています。

保存地区である町並みは、地域の人、国民、人類みんなのもので。しかし、まずは地域に住む人々が最も愛していなければ、訪問者も魅力を感じません。今回の調査報告書は、そうした地域の方々に八日市護国地区の魅力を再発見してもらい、もともと町並みを好きになってもらうための教科書のつもりで作成しました。どうか、ぜひ一度手に取ってみてください。



町並み保存運動のあゆみ

- 昭和47年 ○文化庁第一次集落町並調査実施
- 昭和50年 ○「アサヒグラフ」(朝日新聞社発行)で内子町八日市町並みが紹介される
- 「八日市町並保存会」「町並み研究会」発足
- 昭和52年 ○町並調査を実施
- 昭和53年 ○町単独による保存修理事業開始
- 昭和54年 ○役場内に町並保存対策プロジェクトチームが設置される
- 昭和55年 ○木蝋資料館「上芳我家」開館
- 保存条例および保存計画を策定
- 昭和57年 ○内子町八日市護国地区が「重要伝統的建造物群保存地区」に選定される
- 昭和58年 ○愛媛県文化の里「木蝋と白壁の町並」の指定を受ける
- 昭和60年 ○内子座修理復元工事竣工
- 昭和61年 ○「八日市護国地区町並保存会」発足
- 内子八日市護国地区道路が「日本の道100選」に選ばれる
- ドイツ・ローテンブルク市長を招きシンポジウムを開催
- 昭和62年 ○内子中学生を対象に「第1回木蝋搾り体験学習」を実施
- 第1回観月会を開催
- 昭和63年 ○山本有三記念「郷土文化賞」受賞
- 平成元年 ○建設省「手づくり郷土賞」受賞
- 八日市護国地区で電柱を撤去
- 平成2年 ○大村家、本芳我家、上芳我家のが国の重要文化財に指定される
- 内子町歴史民俗資料館「商いと暮らし博物館」開館
- 平成3年 ○内子および周辺地域の製蠟用具1,444点が重要有形民俗文化財に指定される
- 平成4年 ○「サントリー地域文化賞」受賞
- 平成6年 ○「都市景観大賞(景観形成部門)」受賞
- 平成12年 ○八日市・護国町並保存センター開所
- 平成13年 ○内子町が「優秀観光地づくり金賞総務大臣表彰」を受賞
- ドイツ・ローテンブルク市と友好都市盟約を締結
- 内子町の町並みと和蠟燭が、環境省「かおり風景100選」に選ばれる
- 平成17年 ○「上芳我家」入館者100万人達成
- 平成18年 ○本芳我家住宅修理工事完成
- 八日市護国地区が国土交通省「手づくり郷土賞大賞部門」を受賞
- 平成19年 ○八日市護国地区が「美しい日本の歴史的風土100選」に選ばれる
- 内子地区が「都市景観大賞美しい町並み優秀賞」を受賞

内子の35年 ——成果と課題

岡田 文淑さん(内子10)



内子町における町並み保存運動の35年を振り返ると、成果といえば、「八日市・護国」という地域、そして「内子町」が、地域として認知されたことである。地域のアイデンティティを持つことがこれほど誇らしく、かつ実感できる経験を持った。

そして、町並保存地区が一部の観光資源にとどまらず、市街地を取り巻く山間地域との深い関わりの

中に存在することを知り、山間地域の活性化が市街地の活力を生む原動力になるべきことを、歴史の教訓として学ぶことができた。

町並保存運動から始まった観光振興は、年間に数十万人の観光客を誘引するまでに成長し、愛媛県の中の観光地としての中核的な地位を築き、内子町に新しい産業化への夢と期待を町民に提供することにつながった。今日の町並保存地区は、土曜、日曜ともなると多くの観光客が狭い街路をひしめき合い、生活者としての住民にとって暮らしの環境が壊される。まさにマス・ツーリズムのための観光地になってしまい、保存地区住民が汗してつくり上げた貴重な資産が破壊される危機すら生じようとしている。

内子町における町並保存運動は、観光振興が優先されたことにより、「暮らしの環境」「歴史的環境の保全」といった都市計画の確立をはじめとして、伝統的な木造建築技術の進化と普及など、町並保存にとって一番大切なことへの取り組みが見失われた。

町並み保存運動とは、地域の再生のためのものである。再生の担い手は「人」、にもかかわらず高齢化の現実を避けて通れない。空き家を守る仕組みづくりもまた町並み保存運動である。そして「持続可能」という視点で自らのまちを考え、自らの力でコントロールできるコミュニティを形成したい。

川の自然にふれあえる、やさしい水辺



平成元年から約10年かけて行われた改修工事では4種類の護岸が築かれた。①町内で集められた漬物石を含め、自然石をはった「グリ石護岸」 ②コンクリートは使わず自然石を組み、間に柳を植えて強化した「^{からいし}空石積み護岸」 ③地中に石とコンクリート塊を置いて補強した「よろい護岸」 ④2^つ以上^{やぶ}の巨石をランダムに置いた「^{やぶ}藪再生護岸」



住民運動の一環として河原で開催された、
「水辺の散歩 小田川原っぱ草花調べ」

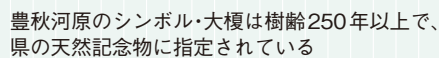


小田川改修をめぐる住民運動は、全国の川の自然を守る先駆けとなりました。当時の経緯を、「町づくりシンポの会」世話人の亀岡徹（あき）さんに尋ねました。

発端は昭和58年のある日、土
 手の榎林が突然伐られたこと。
 小田川の工事のせいと知って
 仲間と徹夜でチラシを作り町中
 に配ったんです。それをきっ
 かけに、特に町のお年寄りたち
 の「川の自然を残して」という
 声が大きくなり、わたしたちは
 工事再開を引き延ばそうと河原
 でいろんなイベントをやりまし
 た。また、護岸ブロックの代わ
 りに家にある石を持ち寄る「漬
 物石一個運動」を始めたら、町
 の人口以上の数は集まったけど
 全然足らん。それなら町民が一
 人1,000円ずつ出し合って
 自然石を買おうやと、「いかに
 き小田川はらっぱ基金」を呼び
 かけたところ、予想外に大きな
 反響があつて工事は完
 全にストップしました。

したり、東京
 の建設省に通
 い詰めたらし
 たけど、なか
 なかええ参考
 例が見つから
 ん。とりあえ
 ず、噂で川つ
 くり先進地と
 聞いたスイスへ行ってみたら、
 偶然にも「近自然河川工法」を
 手がけたゲルディさんという建
 設技官に出会いまして。実際に
 その川を見ると、工事したとは思
 えんほど自然豊かな美しい光
 景で、みんなこれだと確信した
 わけです。その後、ゲルディさ
 ンを招いて開いたシンポジウム
 が決め手になって、なんとか理
 想に近い小田川改修にこぎつけ
 ました。

シンポジウムには国や県の
 河川管理担当者も多数参加



秋になるとコスモスの群生が川べりを覆う



一級河川・肱川の支流である小田川。「大洲和紙」や「大風」を育んだ清流は、自然を生かした住民の憩いの場として親しまれているという。

内子町役場周辺の川沿いの道を歩いてみた。さわやかな風を受け、水面の青と川べりの緑の眺めが何とも心地よい。途中、浅瀬で水遊びをする子どもや釣り人、スポーツを楽しむグループに出会う。河原ではよくイベントも開かれていて、川とのふれあいは生活の一部のようだ。聞けば河川改修を行う住民運動によって自然環境に配慮した工事が進められたのだとか。

改修から10年以上が過ぎた今、昔と変わらず美しい姿をとどめる小田川。春は桜、夏は新緑、秋にはコスモスが彩りを添え、鳥や虫、魚たちが棲むやさしい水辺は、これからも「心のふるさと」であり続けることだろう。



川沿いの「いかざきの杜」は、サイクリングや散歩に最適



第3章

未来へ

STEP BY STEP

商店街のにぎわいを 町の元気のもとに

六日市まちづくり委員会
NPO法人プロジェクトA.Y

商店街

シャッターが下りたままの店舗。店を畳んだ後、建物が壊され、いつの間にかできていた駐車場……。気が付けば、そんな光景がずいぶん目に付くようになっていました。全国各地で叫ばれる商店街の活性化。それは内子町にとっても大きな課題の一つです。

しかし今、町内では、「このまま商店街を消してはいけない」「商店街に、にぎわいを取り戻したい」と願う若い後継者たちが、新たな行動を起こし始めています。

内子本町商店街でカフェや古民家民宿を営む大西啓介さんは、その中心メンバーの一人。平成17年、同世代の仲間28人で「六日市まちづくり委員会」を結成し、「これからの商店街はどうあるべきか」を共に考えてきました。そして21年、一つの商店街として各商店が互いに手をつなぎ合い、同じ目標を共有しようと、「六日市商店街まちづくり協定」を締結。同商店街ならではの歴史や文化を生かしながら、新鮮で活気あふれる商店街をつくってするために、景観整備事業や新たな催しの企画などに取り組んでいます。

また、「より多くの人に内子町に来

てもらい、商店街にも足を運んでもほしい」と、NPO法人プロジェクトA.Yを設立し、イギリス製のレトロバスを購入。JR内子駅と町並み保存地区を結ぶ巡回バスや、町内の名所などを巡る貸し切り観光バスを運行したり、駅前に町が整備した観光振興施設「旅里庵」の指定管理者として、まちの情報を発信したりと、次々に活動を展開しています。

「じつとしていても何も始まらない。とにかく考えたことは行動に移してみる」。そう語る大西さん。「商店街の活性化を通じて、町をもっと元気にしていきたい」と、望む未来の実現のために、仲間と共に力強く前進を続けています。



3_町の名物としてすっかり定着したレトロバス「ちゃがまる」号
4_六日市まちづくり委員会の委員長のほか、いくつもの役職を務め、精力的に活動続ける大西さん



1_六日市まちづくり委員会の新たな取り組みの一つ「うちこ六日市おひなまつり」
2_同催しの名物となりつつある20種以上の長い巻きずし作り。親子で楽しめる

伝統を伝える 熟練の技術

株式会社天神産紙工場

伝統産業

木蠟と並んで、江戸時代から町内で広く生産されていた「大洲和紙」。最も栄えた宝暦年間（一七五一〜一七六三）には、大洲藩の統制下で全国各地に販売され、藩の大きな財源となっていました。その様子は、江戸時代後期の農政学者・佐藤信淵が『経済要録』の中に記した「……大洲半紙の勢ひ天下に独歩せり……」の記述からもうかがい知ることができます。

明治時代中期ころからは、三桎を原料とした改良半紙が評判となり、小田川流域に多数の工場が進出。明治末期には430を超える業者があったといえます。しかし戦後、安い洋紙の普及などで、その多くが廃業。今では、町内に2軒を残すのみとなりました。

その1軒が、株式会社天神産紙工場（沼井光博社長）です。

現在、同工場で紙を漉くのは、国の伝統工芸士に認定された稲月千鶴子さん、高岡ナミエさん、山本咲子

さんの3人。最も長く勤める稲月さんは、中学校を卒業してすぐに同工場に就職したそうです。「当時、地元に残るなら産紙工場が一番良い就職先だな」と話す稲月さん。あれから50年余り、今も毎日のように和紙を漉き続けていますが「どれだけやっても、厚さをそろえて同じように漉くのは難しい」と、厳しいまなざしで手元を見つめ、一枚一枚の紙に向き合います。

品質の高さで知られる大洲和紙の中でも、特に同工場で生産される書道用紙は質量ともに日本一との評価を得ています。しかし、和紙の需要が落ち込む中で、「生き残っていくためには、より良い品質のものを作ることしかない」と沼井社長は語ります。

「今よりもさらに良いもの」を目指して、絶えず磨き続けられる職人の技。それが、地域の誇りである伝統産業を現代に伝えています。

1_国の伝統工芸士の認定を受ける稲月さん 2_高岡さんがった紙の乾燥を専門とする上森初子さん。蒸気を利用し、刷毛で素早くしわを伸ばす



継承と革新 世界への挑戦

株式会社五十崎社中

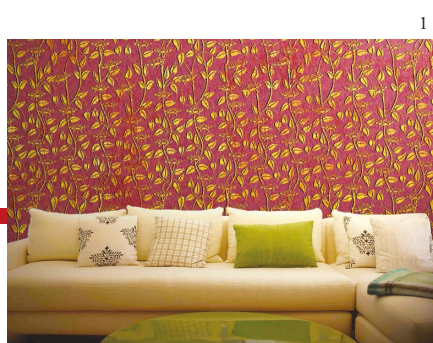
消えゆく手漉き和紙の技術を生かし、未来へと持続可能な新たな産業を育てたい。その思いから内子町商工会は平成19年、中小企業庁が実施する「JAPANブランド育成支援事業」の認定を受け、新しい和紙ブランド「JaïGuéïNa」を立ち上げました。

JaïGuéïNaが提案するのは「和紙のある生活空間」。フランス人デザイナー、ガボー・ウルヴィツキさんと提携し、紙に金属箔で装飾を施す、ガボーさん独自のギルディング技術を用いた壁紙やタペストリーなどのインテリア用品を企画・製造しています。

事業の中心を担う齋藤宏之さんは、東京でのサラリーマン生活に終止符を打ち、奥様の故郷に移り住んで、この取り組みに参加しました。平成20年には、株式会社五十崎社中を設立。ガボーさんから直接指導を受けながらギルディングの技術を学び、商品の製造に当たっています。

また、パリや上海など海外で開かれる展示会にも積極的に参加。「国内はもとより、世界に手漉き和紙の良さを伝えたい」と、奮闘中です。

始まったばかりの新たな挑戦。「一歩踏み出すたびに、新しい壁にぶつかる」と笑いながらも、「地域を活性化させたいという強い思いに変わりはなく」と、情熱を持ち、挑戦を続けています。



1_ギルディング加工を施した壁紙 2_パリで開かれた展示会「メゾン・エ・オブジェ」出展の様子。中央がガボーさん 3_齋藤さん。製造から販売までを一手に担い、多忙を極める





和紙や柿渋染めを通してゆらめく蠟燭の明かりが楽しめる「今は昔、内子彩あんどん」

手仕事

職人こだわりの 技と知恵を集結 内子手しごとの会

町内には、木工、鍛冶、草木染め、竹細工など、さまざまな手工芸の技を持った職人がいます。そんな職人たちが集まり、互いの技術の向上と、それぞれの技の連携による新たな商品の開発を目指して、「内子手しごとの会」を結成しました。

会長を務める児玉政輝さんは「町が合併したことで、職人の人数が増え、幅も広がった。さまざまな分野の技術を持つ仲間との連携によって、良い刺激を得られる」と話します。平成21年8月には、同会が製作した「今は昔、内子彩あんどん」が「21世紀えひめの伝統工芸大賞」準大賞を受賞。ヒノキを使った30センチ角の立方体の内側に蠟燭などを灯して使うもので、側面には和紙や柿渋染め、木格子などを自由に差し込むことができ、組み合わせによるアレンジも楽しめるようになっていました。

10月に開かれた八日市町並観月会や内子座で開かれた和楽器の演奏会などでは、会場内に配されたあんどんの温かな明かりが、風情ある雰囲気盛り上げました。

「江戸時代から続く伝統的な町並みの魅力にふさわしい、魅力ある手作りの品を作っていきたい」と語る児玉さん。今後はさらに「作品を見てももらえるアンテナショップなども開いていきたい」とのこと。「昔ながらの技を次の世代に伝えるきっかけになれば」との期待を込めて、活動に取り組んでいます。



2



1_彩あんどんを製作した内子手しごとの会メンバーの皆さん
2_和楽器の演奏会をあんどんの明かりで幻想的に演出

1



1



2



3

1_緊張しつつ和紙を漉く水口葵さん(小田小学校)に優しくコツを教える西岡さん 2_失敗が許されない1人1枚きりの和紙。山田さんは慎重にゆっくりと刷り上げる 3_自分だけの卒業証書を手に。平田海人くん④と山根創太くん(ともに五十崎小学校)

ふるさとを知る 和紙の卒業証書

和紙工房ニシオカ
版画家・山田きよさん

ふるさと 教育

桜の花がほころび始める3月下旬、町内の小・中学生は、自分で漉いた和紙の卒業証書を持って学舎を巣立っていきます。

内子町はかつて手漉き和紙の産地として大いに栄えた町。多くの楮・三桮を産出した豊かな自然、清流小田川の恵み、誠実に仕事と向き合う人々の気風などが、品質の良い製品を生みだし、町を代表する伝統産業が育まれました。このような伝統産業に触れることで、ふるさとの自然や歴史、文化を学び、自分のまちに誇りと愛情を持つ子どもに育ってほしいと、ふるさと教育の一環として平成21年度から、地域の人々の協力

の下、手漉き和紙による卒業証書作りが行われています。

2学期が終わりを迎えるころ、子どもたちは伝統の技を今に受け継ぐ和紙職人・西岡芳則さんの工房で、一人一人、自分の和紙を漉きます。そうしてできあがったやや厚みのある和紙に、地元の版画家・山田きよさんが一枚ずつ丁寧に文面と校章を手刷りします。

卒業の日、世界に一つしかない卒業証書を胸を張って受け取る子どもたち。その記憶は大人になってもきつと、地域の人々の優しさと共にそれぞれの心に温かくよみがえることでしょう。

地域に残る技を生かして

あいたん
愛炭企業組合

茶道の世界では欠かすことができない炭。内子町は関西の「池田炭」や関東の「佐倉炭」と並ぶ「伊予の切炭」の産地として、古くから知られています。石畳地区に住む大木^{はじめ}さんは、この茶道炭を50年以上にわたって焼き続ける名人です。

茶道炭は、「菊割れ」と呼ばれる模様が美しく、火付きや火持ちに優れ、燃え始めにほのかに炭の香りが残るのが上質とされます。大木さんの炭は、その品質の高さから、多くの茶道家に愛用されてきました。そんな大木さんのもとに近年、炭焼きの技術を学びたいと全国から人が集まってきています。

きっかけを作ったのは、平成15年に家族と共に東京から石畳へ移り住んだ山岡^{とよる}亭さん。当初、山岡さんは農業を志していましたが、大木さんと出会い「ぜひその貴重な技術を教わりたい」と弟子入りを志願しました。「地域にある自然の材を使い、気温や湿度などにあわせて炭を焼く。その奥深さに引かれる」という山岡さん。山岡さんが情報の発信源となり、現在はさらに2人の仲間と共に炭焼きに汗を流しています。

大木さんたちは22年2月、茶道炭のブランド化を目指し、法人組織「愛炭企業組合」を設立しました。過疎化が進む石畳地区で、生活の基盤となる産業を発展させたい。その強い思いが、新しい風を呼び込んでいます。

1_切断面に生じる菊の花のような美しい亀裂が品質の証
2_師匠の大木さん(左)と山岡さん



2

1



1

1_「石畳むら」前の畑でもそばを栽培。季節には可憐な赤い花を咲かせる
2_自慢のそばを打つ亀田さん
3_コシの強さと香りが特徴の石畳そば



2



3

住民自ら「むら」を経営

企業組合「石畳むら」

昔から焼き畑によるそばの実の栽培が盛んだった石畳地区。数十年前までは、どの家庭でもそば打ちが行われていたといえます。

そんな地元の特産であるそばを生かして地域に新しいビジネスを起こそうと、同地区の有志10人が集まって平成20年10月、企業組合「石畳むら」を設立しました。

代表を務めるのは地域の一大イベントである「石畳水車まつり」で長年そば打ちを担当してきた亀田^{つとむ}強さんです。亀田さんは「正統山形流そばの匠」に認定された腕の持ち主。町の天然記念物である古木・東のしだれ桜の下にオープンした「そば処

石畳むら」は、のどかな農村風景を眺めながら本格的な手打ちそばが楽しめる、口コミで評判が広がっています。

「もともとは高齢化が進んで荒れていく田畑を何とかしたいという思いから始まったこと」と語る亀田さん。若い世代が遊休農地を借りてそばを栽培し、お母さんたちが中心となって加工・販売を担う地域循環型産業の展開を目指します。

住民自らが、地域が抱える課題を解決するために取り組むコミュニティビジネス。地域の存続と活性化への期待を込めて、地に足を着けた取り組みが進められています。

農業

新しい農業のカタチ 農業法人という選択

有限会社エコファームうちこ

平成20年12月、川登地区に大型の観光農園「エコファームうちこ」がオープンしました。

同農園を経営するのは、同地区の4戸の農家が組織する農業法人エコファームうちこ（徳山護代表取締役）。近年、この「集落営農」という農業経営の在り方が注目を集めています。

集落営農とは、後継者問題や農産物価格の下落による厳しい生産環境など、個々の農家では解決が困難な農業のさまざまな問題に対し、地域が一つの経営体となって、効率的で安定的な農業経営を目指す取り組みです。農地の一体的な管理、機械や施設整備にかかる負担の軽減、労働時間の短縮など、さまざまな効果が期待されています。

「エコファームうちこ」では、およそ5haの広大な農地に、イチゴやブルーベリー、ブドウ、桃など13種類の果樹を栽培。年間を通じて果物狩りを楽しめる周年型観光農園を目指し、将来は若者の雇用の場づくりにつなげたいと考えています。

同農園で働く服部康政さんは、結婚を機にそれまでの会社勤めを辞めて農業の世界に飛び込みました。現在は、主にイチゴ園を担当。「観光農園なので接客が中心。農作業はもちろんあるけれど、サービスの面も大きい。直接お客さんから反応が返ってくることに一番のやりがいを感じる」と話します。

時代の変化の中で生まれた新しい農業のカタチ。そこには多くの可能性が秘められているようです。

林業

山を守り、 若者を育てる林業を

株式会社藤岡林業

長引く低迷で担い手が不足し、放置林の増加などによる災害の発生が問題となっている林業の世界。面積の約72%を山林が占める内子町にとっても、最重要課題の一つです。

小田地区で林業を営む藤岡雄二さんは、この問題にいち早くから果敢に取り組んでいます。

藤岡さんが目指すのは「山を守るための林業」。「強くて立派な木は高く売れる。でも、それでは弱い木ばかりが残る。山崩れや倒木など、災害の原因となる」と、あえて不良木を選んで間伐し、一本でも多くの良木を残すことで、災害を起こさない山づくりを進めています。

この取り組みを可能にしたのが高性能林業機械の導入。少ない労力で効率的に作業することができ、低コ

ストでの作業が可能となりました。また労働力の軽減によって、林業を敬遠していた若者の就業率も向上。近年は、不況によって職を失った地元出身の若者などを積極的に受け入れています。

「地域で働きたいと思う若者の受け皿になりたい」、そう願っていた藤岡さんのもとへ、今春、小田高校の卒業生が初めて入社しました。宮内聖さんと中田直樹さんの二人です。「林業は全くの未知の世界」という宮内さんは、「今は何をやるっても楽しい。早く一人前に仕事ができるようになりたい」と意欲を燃やしています。そんな若い二人に藤岡さんは「林業は環境を守る仕事。誇りを持って頑張れ」と声を掛けながら、成長を見守っています。



1_小さい子や車イスの人もイチゴ狩りを楽しめるように可動式棚を設置
2_高台に広がる広大な敷地 3_応対の間に摘果作業をこなす服部さん

3



1



3

1_藤岡社長のアドバイスを受けながらチェーンソーの使い方を練習する宮内さん
2_中田さんは丸太を積み込むグラブの操作を練習
3_高性能林業機械ハーベスタ。伐倒、枝払い、玉切り、集積を一台で行う



レストランからり

地元産の旬の食材にこだわった料理が自慢。50種類以上の料理が並ぶ総菜バイキングは、週末のみの開催ながら特に人気。



ハンバーガーショップからり

内子豚を使った「内子豚もろみ焼きバーガー」(写真)や、薫製工房特製ソーセージ入りホットドッグが評判。天気の良い日は川沿いのデッキでおぼるのがおすすめ。



からりパン工房

季節の野菜や果物を使った手作りパンがズラリ。美味しいと評判の「からりブレッド」は、いつもすぐ売り切れてしまう大ヒット商品。



あぐり亭

地元農家のお母さんが運営する食堂。特産のもち麦を使った「もち麦うどん」がイチオシ。

MESSAGE



内子町の人と自然が作るこだわりの味を全国に届けたい
(株)内子フレッシュパークからり
沖野智寿子さん

内子町は「バナナ以外は何でもできる」と言われるほど農産物の宝庫。だからこそ「日本でこしかなない」加工食品を作れば、農家の皆さんや町全体をますます活気づけられると考えました。

その第1弾として開発したのが、トマトソースとケチャップです。材料は町内の契約農家が厳しい安全基準に基づいて栽培した完熟トマトで、食品添加物を一切使用せず、味にこだわった自信作。全国にこの美味しさを届けたいと思い、現在は自社HPのネットショップのほか、大手通販サイトにも出店しています。

さらに今春、トマト加工商品第2弾として「ジェラート」と「とまとソルベ」を発売。こちらも味や食感にかなりこだわりました。こうした内子町ならではの商品作りを通して、地域の皆さんと一緒に「内子町からり」の名を、もっともっとと広めていきたいですね。



早くも大好評の「とまとソルベ」



からり直売所

四季を通じて新鮮な野菜や果物、加工品、花などが並ぶ。商品にはすべて出荷者の連絡先が記され、品質も厳しくチェックされているので、安心して購入できる。



からりシャーベット工房

内子町産の果実や野菜が原料のアイス・シャーベットコーナー。中には「むらさき芋」「はったい粉」「もち麦」といった変わり種も。



直売所に並ぶのは、町内で採れた新鮮な野菜や果物、花き、手作りの総菜・菓子など。その種類と数は驚くほど多く、しかも安いのでついあれもこれもとかごに入れてしまう。また、レストランの料理からシャーベット、パン、ハンバーガーに至るまですべて内子町産食材を使ったオリジナルで、中にはいつも即売売の人気商品もあるとか。ショッピングはもちろん、ドライブやツーリングの休憩ポイントに、また一日のんびり過ごす癒しの場として、「からり」は訪れる人みんなをいつも楽しませてくれる仕掛けがいっぱいようだ。



買って食べて遊んで、一日楽しいオアシス 内子フレッシュパークからり



結の集落をみつめて

かつて日本の多くの地域には、田植えや稲刈り、屋根替えなど、多くの労働力が必要な作業を行う場合に、集落の住民総出で助け合い、人手を貸し合^{ゆい}って生活の営みを維持する「結」という制度が存在していました。

しかし今、地域のつながりは薄れ、結は失われつつあります。

近年、人口の半数以上が65歳以上の高齢者であり、共同体としての機能を維持することが限界に達した集落が、「限界集落」と呼ばれています。けれども、当地域の多くには今も結の精神が残り、人々は互いに支え合いながら、明るく、たくましく、この時を生きています。

結の集落に暮らす人々の姿。そこには、今の時代が忘れかけてしまった大切な何かが映し出されているのかもしれません。





大瀬の南東部、御祓川の上流に位置する池田地区。37世帯・65人の住民のうち65歳以上の人が78.5割を占め、町内で最も高齢化率が高い自治会となっています（平成21年4月1日現在）。

同地区は、明治時代以前は地名を「炎野」といいました。しかし当時火災が頻発していたことから改名することとし、消火するための水にちなんで、ため池を作り田を広げようと、「池田」という名が付けられました。それ以来、野山を切り開き、池を作り、開田

「若いもんはおらんになって、暮らしも不便になってしもた。それでも、住み慣れたこの場所が一番」

するために住民は懸命に働いたといいます。今も地域内には20カ所以上のため池が残り、人々は先人に深い感謝の念を持ち続けています。

上永兼松さん・ミサヲさん夫妻は、そんな池田地区で農業を営んでいます。兼松さんは84歳、ミサヲさんは76歳。日当たりの良い山の斜面に立てた一軒家で、互いにいたわり合いながら仲良く暮らしています。

現在は、主にユズと栗を栽培し、出荷。「ユズはあんまり手がいらんけん」



と話すミサヲさん。それでも収穫時期は二人で朝から山へ出かけ、ミサオさんが摘み取った実をトップカーに積んで、兼松さんが家まで往復。午後からは、日が暮れるまで選別作業を続けます。傷が付いて売り物にならない実は、ミサヲさんが一個ずつ根気よく果汁を搾ってビン詰めにし、松山市に住む親類などに分けているそう。「姪が喜んで取りにくるんよ」とうれしそうに話します。

そのほかにも、畑では大根、キャベツ、タマネギ、ジャガイモなどの野菜や、イチゴ、キウイフルーツなどの果物を栽培。食べきれない野菜などは漬け物にし、毎日の食卓へ並べます。畑の脇には鶏小屋があり、毎朝新鮮な卵を産んでくれるとか。「何でもあるけんな、食べるには全然困らんのだ」と、ミサヲさんは少し誇らしげに胸を張ります。ただ「田んぼはあと何年続けられるか分からん」とポツリ。田んぼは山のふもとにあり、これまではバイクで出かけていたものの、昨年、二度転倒してしまい、息子さんから運転を止められたそうです。

お子さんたちはそれぞれ独立して町外に居を構え、週末ごとに農作業などを手伝い帰ってくるとのこと。高齢の両親を心配して同居を進められるものの「街に住んだら、知つとる人もおらんし、畑もないし、何してええか分からん」と言うミサヲさん。「元氣なうちは、ここで住むのがええ」と明るく語る表情が、印象に残りました。

❖集落の状況

日本では、歴史的に地縁的な集落が形成され、住民の生活や生産活動はこの集落を基礎的な単位として営まれてきました。また集落単位の活動を通じて、国土や自然環境の保全、美しい景観の形成、伝統文化の継承などさまざまな機能が確保されています。

しかし現在、人口の減少および高齢化が著しく進行し、集落としての機能を保持することが困難な集落の数が急激に拡大しています。国土交通省が平成 18 年度に実施した「国土形成計画策定のための集落の状況に関する現況把握調査」（国土交通省・総務省）によると、全国の過疎地域にある過疎集落約 62,000 のうち、今後 10 年以内に消滅またはいずれ消滅の可能性がある集落は約 2,600 となっています。（下表）

■高齢者割合別・消滅の可能性がある集落数

	10年以内に消滅	いずれ消滅	存続	無回答	計
高齢者割合 50%以上	306 3.9%	1,285 16.3%	5,453 69.2%	834 10.6%	7,878
高齢者割合 50%未満	89 0.2%	806 1.5%	45,680 87.7%	5,529 10.6%	52,104
不明	28 1.2%	129 5.6%	1,251 54.6%	883 38.5%	2,291
全体	423 0.7%	2,220 3.6%	52,384 84.1%	7,246 11.6%	62,273

さらに国内では、今後も人口減少・高齢化の進行が予測されており、集落の消滅によって地域住民の生活が維持できなくなるとともに、農地や森林などが荒廃し、貴重な自然環境や資源が失われてしまうことが懸念されています。

内子町では平成 21 年、町内の集落の現状を把握し課題に対応するため、「限界集落实態調査検討委員会」を設立し、山間部を中心に聞き取り調査を実施しました。その結果、独居や高齢者のみの世帯が多く、日常生活を送る上でさまざまな問題を抱えていることが浮き彫りとなりました。

農地や山林の荒廃は、農林業の振興だけでなく、水源の涵養や土砂災害の防止など公益的な視点から、市街地の住民も巻き込んだ取り組みが必要です。また当該集落の住民にとって最も身近で重要な問題は、交通手段の確保であることも分かりました。自主防災組織の充実や、救急医療体制の整備、緊急通報体制の強化など、多くの課題があります。

誰もが住み慣れた愛着ある地域でいつまでも安心して暮らせるように、結の集落を守り、再生へ導く取り組みが求められています。

限界集落实態調査の結果概要

内子町では、全行政区 153 区のうち、人口の 50%以上が 65 歳以上の高齢者である 25 行政区を対象に実態調査を行いました。調査は 143 世帯・171 人、調査世帯率は 24.60%です。

町全体では、総人口 19,601 人のうち、65 歳以上の人口が 6,480 人（男性 2,599 人、女性 3,881 人）。そのうち、一人暮らしの高齢者が 870 人となっています（平成 21 年 4 月 1 日現在）。

聞き取り調査では、困っていることとして「買い物や通院が不便」「ゴミの収集場所までが遠い」「世帯数の減少で 1 世帯当たりの道路整備や神社の維持費などの負担が増えた」など、多くの人が日常生活に関することを上げました。また「農林業の衰退などによって地域では生計が成り立たず、後継者の増えようがない」という声も多数ありました。町外に住む身内の支援を受けながら生活している人が多く、見寄りの無い人ほど深刻な状況となっていることがうかがえました。

■調査対象行政区の人口状況等

（平成 22 年 11 月 1 日現在）

行政区	全 体				65 歳以上				高齢化率(%)
	世帯数	男	女	人口	世帯数	男	女	人口	
山鳥坂	6	4	7	11	6	4	7	11	100
池田 2	13	10	12	22	11	7	11	18	81.82
池田 1	23	20	22	42	21	14	19	33	78.57
下白杵	15	15	19	34	17	12	12	24	70.59
北浦	14	16	12	28	13	10	9	19	67.86
白杵中	19	19	21	40	22	14	13	27	67.5
東組	24	26	28	54	21	15	21	36	66.67
中田渡 4	11	8	14	22	11	4	10	14	63.64
源台	21	19	22	41	17	10	15	25	60.98
上川上	31	27	31	58	22	14	21	35	60.34
上日ノ地	27	31	32	63	24	17	21	38	60.32
野村	23	26	25	51	20	11	18	29	56.86
乙影山	21	23	21	44	16	11	14	25	56.82
大平	18	13	21	34	14	5	14	19	55.88
上川西	31	33	39	72	26	19	20	39	54.17
北深	20	20	17	37	14	9	11	20	54.05
上田渡谷	17	20	19	39	12	10	11	21	53.85
熊ノ滝	28	35	36	71	23	17	21	38	53.52
祝谷	19	14	22	36	15	6	13	19	52.78
石畳 7	61	66	73	139	46	29	44	73	52.52
豊秋町	18	20	24	44	15	11	12	23	52.27
中田渡 1	35	29	40	69	25	12	23	35	50.72
長田	62	66	78	144	47	29	44	73	50.69
道德	13	13	17	30	10	5	10	15	50
日野泉	10	11	11	22	7	5	6	11	50
計	580	584	663	1247	475	300	420	720	

⑥社会福祉協議会が行うデイサービスは月に 2 回。行き帰りのバスの中でも、ご近所同士にぎやかなおしゃべりが続く ⑥毎回、血圧測定や健康相談が行われ、体調を確認。通院も不便なため、健康には人一倍気を遣う



日々の生活の中で困っていることを尋ねると、「やっぱり交通が不便になったなあ」との答え。以前は同地区にも小学校があり、定期バス路線が通っていましたが、平成元年に小学校が閉校。その後しばらく運行されていた福祉バスも無くなり、今は月に 2 回、家の近くまで迎えに来てくれるデイサービスを利用して、通院や買い物などの用事を済ませているそうです。普段は、ご近所といっても谷を挟んだ向かいの山などにあるため気軽に行き来することができず、一緒に出かけるデイサービスの日を心待ちにしている様子。カレンダーには忘れてしまわないように○印が付けられていました。

同地区では、人数が少ないこともあり住民同士が互いを気遣い合って暮らしています。地域の会合がある日は、頼まなくても誰かが迎えに来てくれるとのこと。自治会で開く敬老会も、「自分が準備して席に着くんよ」と笑いながらも、協力して今は何とか実施できていると言います。しかし、祭りなどの行事はすでに開催が困難な状況です。同地区にある大木「芋種桜」の元で毎年開いていた祭りも、来年は休止が検討されています。

庭先から、向かいの山に点々と並ぶ家を眺めながら、「あの家も、その向こうの家も、もう空き家になったんよ。もう人が住んぶる家の方が少のうなった」と寂しそうに話すミサヲさん。「仕事もないし、不便なし、若者はここには住めまい。でも、わしらはやっぱり、住める間はここで暮らしたい」。そう何度も繰り返ししていました。



「どっちかが一人になってしまったら息子がおる所に行かないけんかな。それまでは、ここで二人で住むのがええ」



01. うちこんかいプロジェクト



内子町に人や企業を誘致する施策や活動に取り組む「うちこんかいプロジェクト」。就労の場確保のための企業誘致や、I・U・Jターンなどの移住希望者の受け入れを積極的に進めます。

- 空き家情報を提供する「うちこ屋バンク」
- ホームページなどを活用した情報発信

02. 農林業再生プロジェクト



内子町の基幹産業である農林業。「生産」だけでなく、付加価値の増大を目指したり、地域に根差したブランド化を図ったりします。

- 農業法人の経営支援
- 農畜産物加工施設を活用した加工作物の栽培促進
- 地元材を活用した住宅の開発

03. 内子ツーリズムプロジェクト



さまざまな観光資源を連携させる滞在型観光「内子ツーリズム」。これには観光事業だけでなく、地域文化継承や農業振興、景観保全などのまちづくりと共に活性化を目指します。

- 街歩き型観光の基盤整備
- グリーン・ツーリズムの振興

04. エコエコプロジェクト



エコロジー（環境保全）とエコノミー（地域経済の活性化）が融合したまちづくりを目指す「エコエコプロジェクト」。町民の皆さんと策定した「内子町環境基本計画」を基に、環境まちづくりに取り組みます。

- 木質バイオマスや廃油など石油代替燃料の利活用
- 森林の多面的機能に着目した「うちこの森」再生

05. 景観まちづくりプロジェクト



全国的な統一基準による横並びの景観施策ではなく、自然や歴史、地域の特性に合った独自の視点で策定された「内子町景観まちづくり計画」を基に、内子町らしい景観づくりを展開します。

- 内子町景観まちづくり計画の定着
- 農村景観まちづくりの推進

内子町の未来を描くシナリオ

子どもたちに夢を 若者に元気を お年寄りに安心を

「内子町総合計画」

Project
10

町並み・村並み・山並みが美しい内子町。今ある資源を大切に、持続的に発展するまちづくりを目指しています。そのためには、将来を担う子どもたちが夢を持つことができ、今を動かす若者が元気に活躍でき、そして礎を築いてきたお年寄りが安心できるまちでなければなりません。

内子町は、まちづくりのシナリオである「内子町総合計画（2007-2015）」で重要施策「プロジェクト10」を掲げ、取り組みを進めています。

内子町にあるたくさんの輝きや芽吹き。みんなでさらに輝かせ、大きく育てていきましょう。

06. 内子教育改革プロジェクト



本来の「教育」に加えて、個性や先見性を伸ばす内子らしい教育を推進するため、内子の教育を担う組織や仕組みを果敢に改革していきます。

- ふるさと教育の推進
- 国際交流や外国語活動など国際人教育の推進
- 学校、幼稚園・保育園の統廃合など組織見直し

07. 健康づくりプロジェクト



町民の生涯にわたる健康づくりについて、保健・医療・福祉を機能的に連携させ、「予防医学」などの知見を活用しながら支援の仕組みを整えます。

- 町民の健康管理の仕組みづくり
- 内子町社会福祉協議会の機能強化
- 龍王再開発による健康増進施設の活用促進

08. 元気商店街プロジェクト



商店街の個性を生かしつつ、幹線交通と快適に歩ける空間のバランスを取り、小規模でも充実した市街地を形成します。また若い世代が中心となった活性化の試みを応援・支援する環境を創出します。

- 商店街活性化グループの活動支援
- 旧内子町立図書館周辺整備事業の導入

09. 自治会システム構築プロジェクト



「地域防災」「健康づくり」「景観まちづくり」「限界集落対策」など、各地域の特徴を生かした地域づくり計画の見直しなどにより、より一層の町民の自治力強化を図ります。

- 地域づくり計画の見直し
- 限界集落対策など自治センター機能の強化

10. 行政改革プロジェクト



今後の厳しい財政状況を見越し、中長期的な展望を踏まえて、行政運営の効率化と透明性を高めるための「目標管理型」行政運営を行います。また、指定管理者制度などの活用も図ります。

- 「内子町経営会議（行財政運営会議）」の開催
- 職員研修制度の改革

未来へつなぐまちづくりのために



平成22年1月1日、内子町は町政5周年を迎えました。

17年に行われた旧内子町・五十崎町・小田町の合併によって、まちづくりの胎動は大きな産声を上げ、新たな内子町が誕生しました。そして今、共に「町並み、村並み、山並みが美しい持続的に発展するまち」を目指す一体感が生まれ始めたと感じています。

現在、日本は大きな転換期を向かえています。一昨年のリーマンショックに端を発した世界同時不況、昨年のドバイショック、金融危機、そして政権交代など、先行きは不透明な状況です。

しかし、わたしたちの先人はこの内子町を最適な場所として、自然と語り、時には怒りに触れ、時には恵みを受けながら、その時代時代を懸命に生きてきました。現代においても、町民の皆様はそれぞれの地域で生き生きと輝きながら、先人から受け継いだかけがえのない伝統や文化を守り育て、真の豊かさを願い求めて暮らしを営んでいます。

そのような「今」の内子町を生きる人々の輝きを未来へ語り伝えるために、この『内子町勢要覧』を作成しました。

内子町が内子町らしく、誇りと品格ある郷土として、将来にわたり発展し続けるために、新しい風を起こし、今ある町の財産を一層輝かせながら、「住んでよし、訪ねてよし、美し内子^{うま}」の実現に向けて町民の皆様と一緒に歩んでまいります。

内子町長 稲本 ^{たかとし} 隆壽



概況

人口

保健・福祉

産業

産業・商業

財政

生活環境

道路・防災

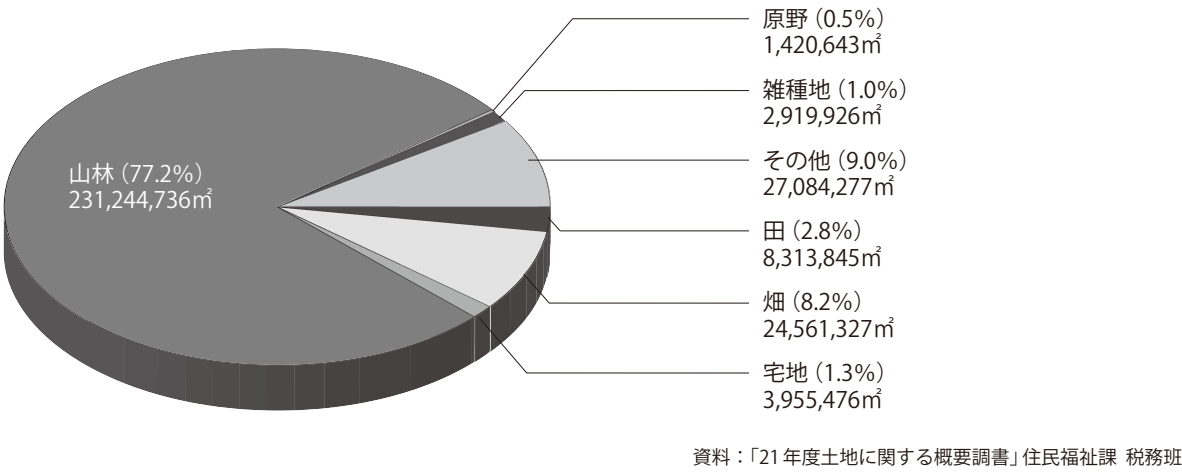
教育・文化

行政・議会

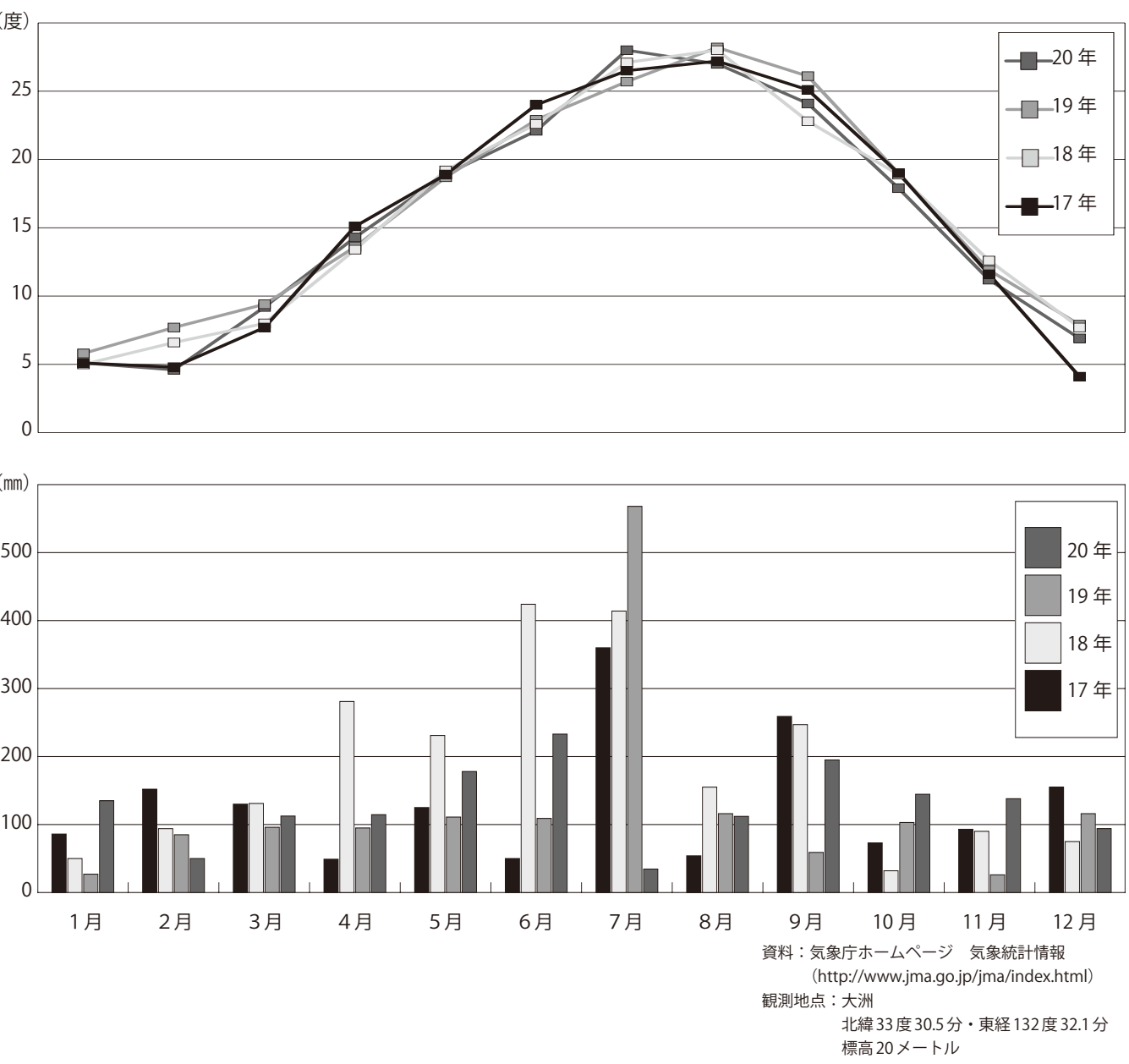
内子町勢要覧 2010

資料編

■土地利用状況



■月別平均気温と総降水量

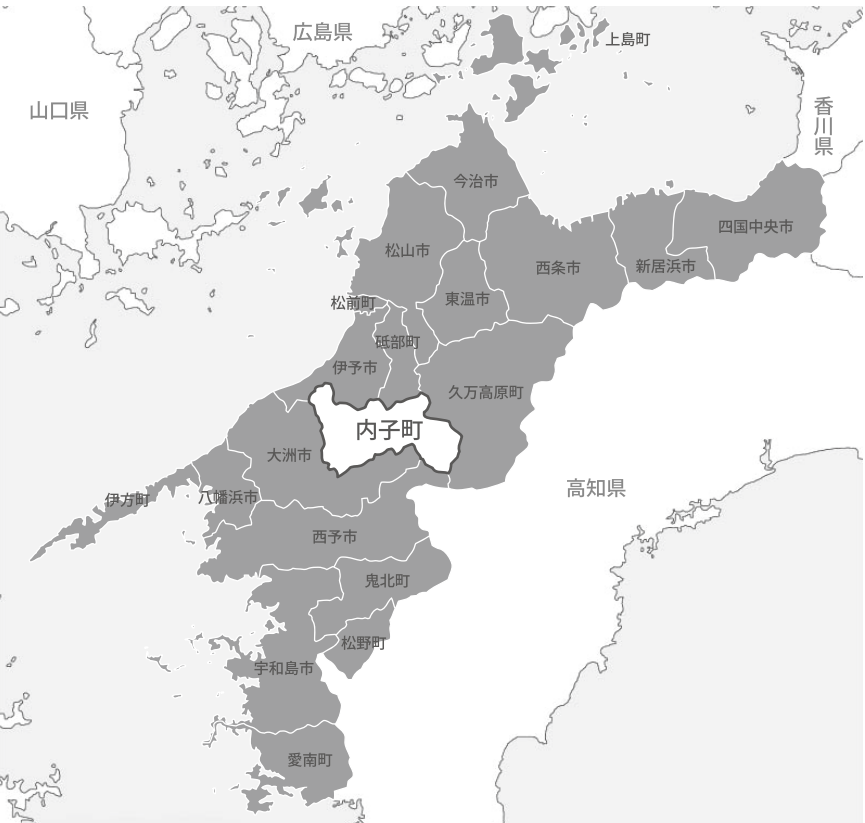


■位置と地勢

内子町は、愛媛県のほぼ中央に位置し、県都松山市から約40Kmの地点にあります。東部は久万高原町、北部は砥部町および伊予市、西部から南部にかけては大洲市、南東部は西予市とそれぞれ接しています。

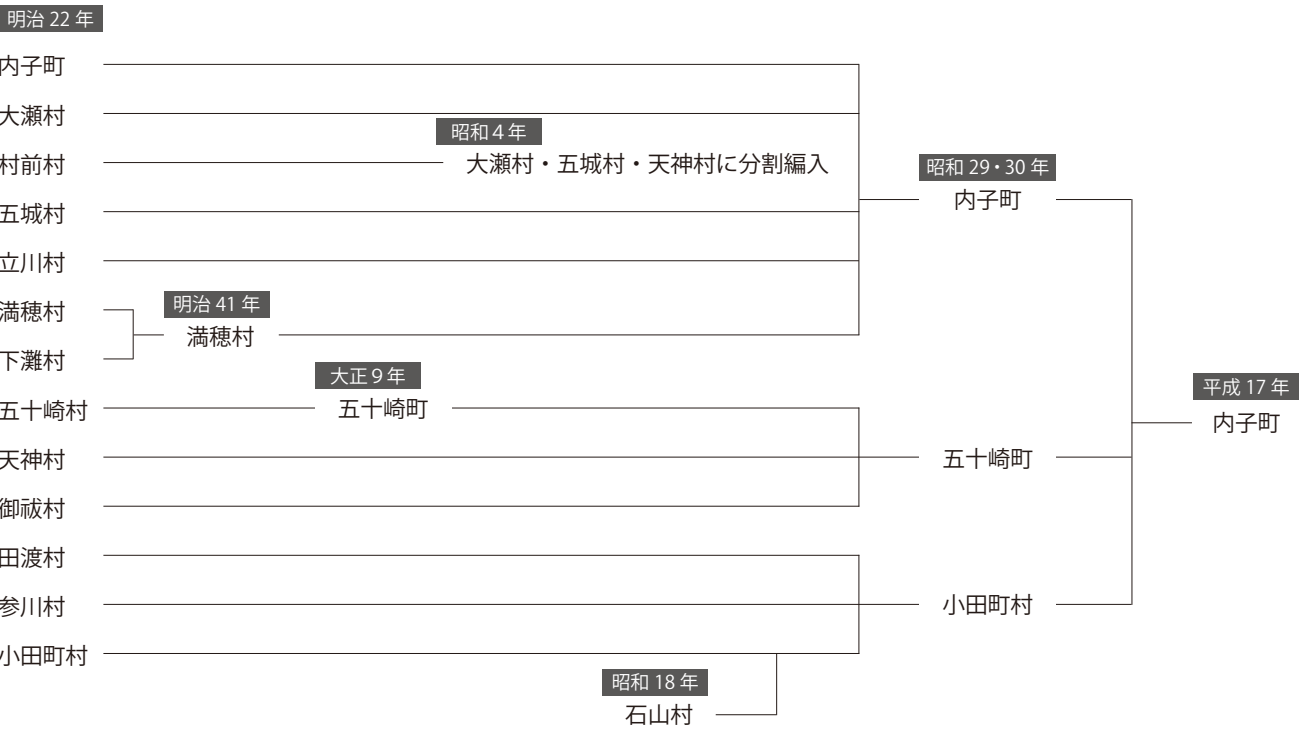
総面積は299.50km²で、東西30.0km、南北17.9kmにわたって広がっており、町の中央部を一級河川・肱川の支流である小田川が流れています。地形は、平坦地が少なく、ほとんどが山地および丘陵地です。

位置	東経 132度39分
	北緯 33度31分
面積	299.50平方キロメートル



■沿革

平成17年1月1日に、旧内子町・旧五十崎町・旧小田町の3町が合併し、新内子町が誕生しました。



国民健康保険税

[単位：世帯・人・円]

年度	世帯数	被保険者数	調定額	1人当たり平均額
17	4,632	8,485	579,302,045	68,273
18	4,646	8,138	533,335,663	65,536
19	4,629	8,021	610,249,558	76,081
20	3,287	6,029	589,754,887	97,819

(注) 20年度から、75歳以上の人は後期高齢者医療保険制度に移行したため、国民健康保険の被保険者数が減少しています。

国民健康保険 医療給付費額

[単位：世帯・人・円]

年度	世帯数	被保険者数	費用額	1人当たり平均額
17	4,632	5,281	1,312,869,566	248,602
18	4,646	5,075	1,290,979,156	254,380
19	4,629	5,013	1,297,208,264	258,769
20	3,287	6,029	1,688,382,616	280,044

(注1) 被保険者数は「一般」のみ

(注2) 後期高齢者医療保険制度の創設に伴い、20年度から退職被保険者の適用範囲が変更されたため、一般の被保険者数および医療費額が増加しています。

老人医療費

[単位：人・件・円]

年度	受給者数	受給件数	医療費（費用額）	1人当たり平均額	1件当たり平均額
17	4,292	97,455	3,512,751,790	818,441	36,044
18	4,096	94,010	3,350,394,023	817,967	35,638
19	3,906	101,015	3,537,129,633	905,563	35,015

後期高齢者医療保険

[単位：世帯・人・円]

年度	被保険者数	受給件数	医療費（費用額）	1人当たり平均額
20	3,872	82,463	2,933,296,024	757,566

(注) 医療費は20年4月～21年2月までの11カ月分

資料：住民福祉課 住民班

介護保険の認定状況と給付額

[21年3月末日現在、単位：人]

区分		要支援1	要支援2	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
1号	施設	0	0	14	45	73	71	78	281
	居宅	102	116	120	136	108	66	31	679
	未利用	51	42	32	18	10	14	32	199
	計	153	158	166	199	191	151	141	1,159
2号	施設	0	0	0	0	1	2	4	7
	居宅	1	6	6	5	3	1	1	23
	未利用	0	0	0	0	0	0	1	1
	計	1	6	6	5	4	3	6	31
計	施設	0	0	14	45	74	73	82	288
	居宅	103	122	126	141	111	67	32	702
	未利用	51	42	32	18	10	14	33	200
	計	154	164	172	204	195	154	147	1,190
割合		12.9%	13.8%	14.5%	17.1%	16.4%	12.9%	12.4%	100.0%

年度	世帯数	被保険者数	保険料		介護サービス費	
			調定額：円	1人当たり平均：円	費用額：円	1人当たり平均：円
17	6,504	1,189	235,200,220	36,162	1,685,261,624	1,417,377
18	6,497	1,175	271,578,300	41,801	1,694,545,593	1,442,166
19	6,480	1,170	274,547,500	42,368	1,800,469,028	1,538,862
20	6,444	1,190	270,745,550	42,015	1,824,976,584	1,533,594

資料：住民福祉課 保健福祉班

人口などの推移

人口		S55	S60	H 2	H 7	H12	H17
	内子	13,415	12,760	12,147	11,802	11,231	
	五十崎	6,482	6,338	6,043	5,718	5,720	
	小田	5,439	4,981	4,497	4,158	3,831	
	計	25,336	24,079	22,687	21,678	20,782	19,620
	増減数	－	△1,257	△1,392	△1,009	△896	△1,162
	増減率(%)	－	95.0	94.2	95.6	95.9	94.4

世帯数	内子	3,639	3,596	3,601	3,642	3,688	
	五十崎	1,810	1,808	1,827	1,804	1,867	
	小田	1,663	1,612	1,557	1,523	1,507	
	計	7,112	7,016	6,985	6,969	7,062	7,015
	増減数	－	△96	△31	△16	93	△47
	増減率(%)	－	98.7	99.6	99.8	101.3	99.3

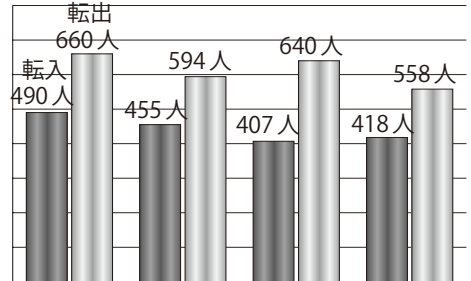
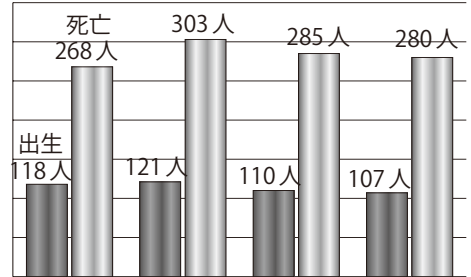
高齢者人口	内子	1,968	2,052	2,425	2,965	3,264	
	五十崎	879	993	1,167	1,378	1,506	
	小田	931	962	1,128	1,392	1,476	
	計	3,778	4,007	4,720	5,735	6,246	6,467
	増減数	－	231	713	1,015	511	221
	増減率(%)	－	106.0	117.7	121.5	108.9	103.5
	人口に占める割合	町(%)	10.7	16.7	20.8	26.5	30.1
		県(%)	－	12.9	15.4	18.5	21.4
		国(%)	－	10.3	12.0	14.5	17.3

資料：国勢調査

合併後の人口などの推移

		H18	H19	H20
人口	総数	20,010	19,601	19,291
	男	9,533	9,293	9,143
	女	10,477	10,308	10,148
世帯数		7,295	7,268	7,306

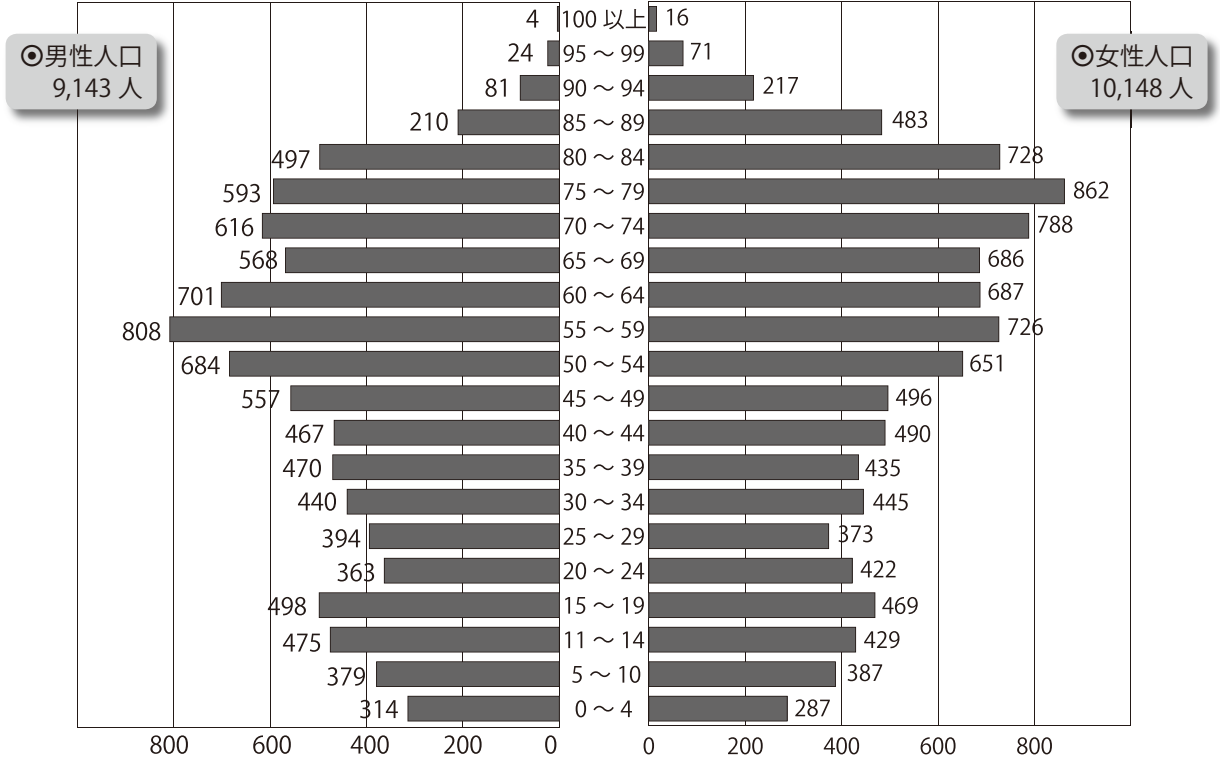
自然動態・社会動態



資料：住民福祉課 住民班

年齢別人口ピラミッド

[21年3月末日現在、単位：人]



資料：住民福祉課 住民班

■経営耕地面積の推移

[単位：ha]

	総面積	田	畑	樹園地
S 50	2,653	799	701	1,154
S 60	2,703	707	734	1,263
H 7	2,111	548	620	942
H 17	1,446	347	446	653

資料：農林業センサス

■林野面積

年度	総数	林 野 面 積 (ha)						林野率 (%)	樹林地面積 (ha)		
		利用土地種類別面積		所有形態別面積					総面積	民有林人工林	
		森林	森林以外	国有	緑資源機構	公有	私有			面積	率 (%)
S 50	23,124	23,124	—	4,232	—	517	18,375	77.2	—	—	—
S 60	23,381	23,380	1	4,303	—	422	18,656	78.1	18,234	11,942	65.5
H 12	22,955	22,800	155	4,295	—	440	18,220	76.6	18,785	12,565	66.9
H 17	23,088	22,998	90	4,218	33	620	18,217	77.1	18,831	12,767	67.8

資料：2005 年農林業センサス

■事業所数と販売額

[単位：件・万円]

	卸売業	小売業	合 計	販売額
S 51	30	505	535	1,031,600
S 60	33	488	521	2,279,029
H 9	33	379	412	1,988,697
H 19	37	308	345	1,540,674

(注) S51～H 9の数値には「飲食店」分を含まない

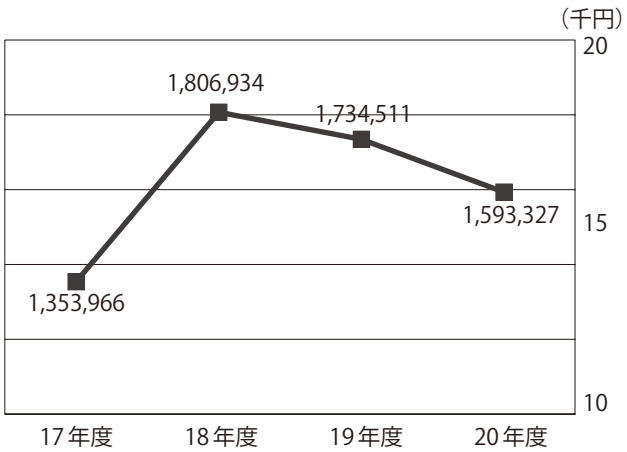
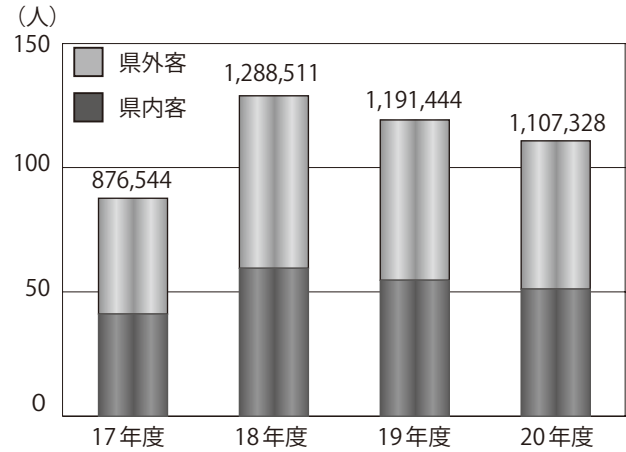
資料：商業統計調査（経済産業省）

■入り込み観光客数および消費額の推移

[単位：人・千円]

年度	観光客数	日帰り・宿泊別		県外・県内別		消費額
		日帰り客	宿泊客	県外客	県内客	
17	876,544	855,071	21,473	410,739	465,805	1,353,966
18	1,288,511	1,268,169	20,342	594,771	693,740	1,806,934
19	1,191,444	1,170,203	21,241	546,711	644,733	1,734,511
20	1,107,328	1,087,337	19,991	511,143	596,185	1,593,327

資料：総合観光センター

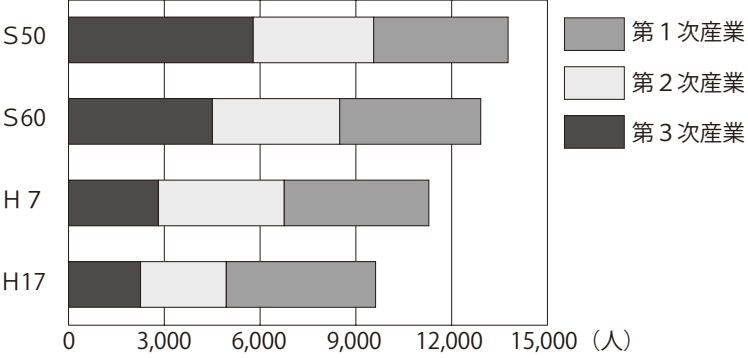


■産業別就業者数の推移

[単位：人]

年度	第 1 次産業				第 2 次産業				第 3 次産業							分類不能	合計
	農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	卸売・小売業	金融・保険業	運輸・通信業	サービス業	公務	その他	計		
S 50	5,504	267	7	5,778	26	1,702	2,049	3,777	1,678	101	471	1,581	354	28	4,213	15	13,783
S 60	4,205	296	1	4,502	18	1,621	2,350	3,989	1,663	131	411	1,818	365	32	4,420	4	12,915
H 7	2,676	136	3	2,815	11	1,736	2,188	3,935	1,627	121	409	2,001	343	35	4,536	21	11,307
H 17	2,161	91	3	2,255	4	1,367	1,310	2,681	1,438	79	311	879	277	1,698	4,682	7	9,625

資料：国勢調査



■産業別町内総生産

[単位：百万円]

年度	第 1 次産業	第 2 次産業	第 3 次産業	輸入税	その他 (控除)	合計
S 50	5,232	4,231	8,573	—	—	18,036
S 60	5,109	11,737	19,067	—	1,162	34,751
H 7	4,836	21,748	30,877	128	1,874	55,716
H 17	3,445	13,724	35,014	350	1,916	50,617

資料：愛媛県市町民所得統計

■専業・兼業別農家数の推移

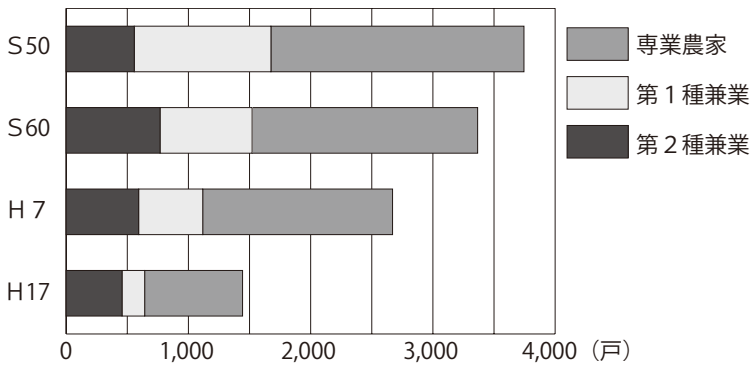
[単位：戸]

	専業農家	第 1 種兼業	第 2 種兼業	総農家
S 50	557	1,118	2,070	3,745
S 60	768	753	1,845	3,366
H 7	593	524	1,553	2,670
H 17	457	185	801	1,443

(注) 第 1 種兼業＝農業所得を主とする兼業農家

第 2 種兼業＝農業所得を従とする兼業農家

資料：農林業センサス



■年齢別農業就業者数

[単位：人]

	総数	男 性				女 性			
		16-29 歳	30-59 歳	60 歳以上	計	16-29 歳	30-59 歳	60 歳以上	計
S 50	6,453	—	—	—	2,502	—	—	—	3,951
S 60	5,544	201	1,001	1,118	2,320	196	1,679	1,349	3,224
H 7	4,221	115	428	1,239	1,782	114	869	1,456	2,439

	総数	男 性				女 性				
		15-29 歳	30-49 歳	50-64 歳	65 歳以上	計	15-29 歳	30-49 歳	50-64 歳	65 歳以上
H 17	1,243	79	98	261	760	1,198	74	172	399	829

資料：2005 年農林業センサス

■上水道の供給状況・排水量の推移

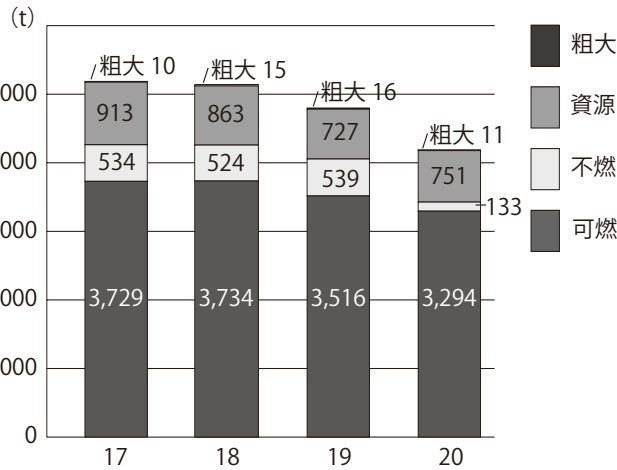
[単位：戸・人・㎡・ℓ・％]

年 度	給水戸数	給水人口	配 水 量				年 間 有収水量	有収率
			年間配水量	1 日最大	1 日平均	1 人 1 日平均		
17	2,538	6,712	964,962	3,471	2,637	393	838,659	86.91
18	2,563	6,695	944,263	3,635	2,587	386	814,428	86.25
19	2,520	6,561	936,764	3,194	2,566	391	823,087	87.86
20	2,394	6,268	913,278	3,199	2,502	399	788,610	86.35

■ごみ搬入状況

[単位：t]

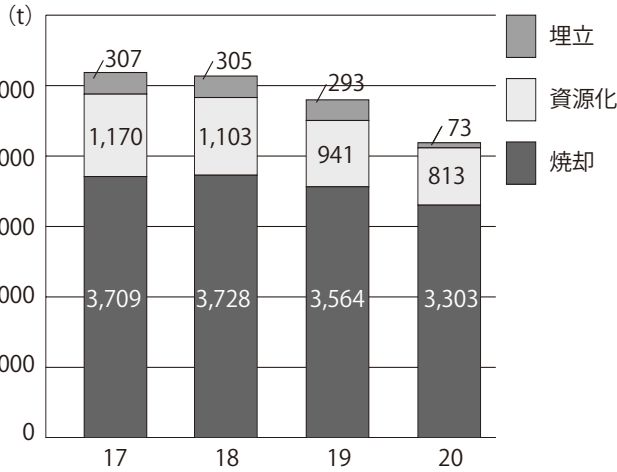
年 度	総 量	可燃ごみ	不燃ごみ	資源ごみ	粗大ごみ
17	5,186	3,729	534	913	10
18	5,136	3,734	524	863	15
19	4,798	3,516	539	727	16
20	4,189	3,294	133	751	11



■ごみ処理状況

[単位：t]

年 度	総 量	焼 却	資源化	埋 立	最終埋立
17	5,186	3,709	1,170	307	667
18	5,136	3,728	1,103	305	713
19	4,798	3,564	941	293	691
20	4,189	3,303	813	73	429



■下水道普及率・水洗化率

[単位：戸・人・％]

年度	世帯数	人口 ①	供用開始区域			水洗化状況			
			世帯数	人口 ②	普及率 ③／①	世帯数	人口 ④	事業所など	水洗化率 ⑤／④
17	7,278	20,324	1,896	5,124	25.2	1,328	3,585	132	70.0
18	7,295	20,010	1,908	5,101	25.5	1,419	3,795	138	74.4
19	7,267	19,601	1,907	5,046	25.7	1,452	3,883	149	77.0
20	7,306	19,291	2,029	5,249	27.2	1,498	3,927	148	74.8

■し尿処理状況

[単位：戸・人・㎡]

年度	収集世帯	収集人口	し尿	汚泥	総排出量
17	5,950	16,739	3,718	2,772	6,490
18	5,876	16,215	3,550	2,937	6,487
19	5,815	15,718	3,390	2,775	6,165
20	5,808	15,364	3,145	2,756	5,901

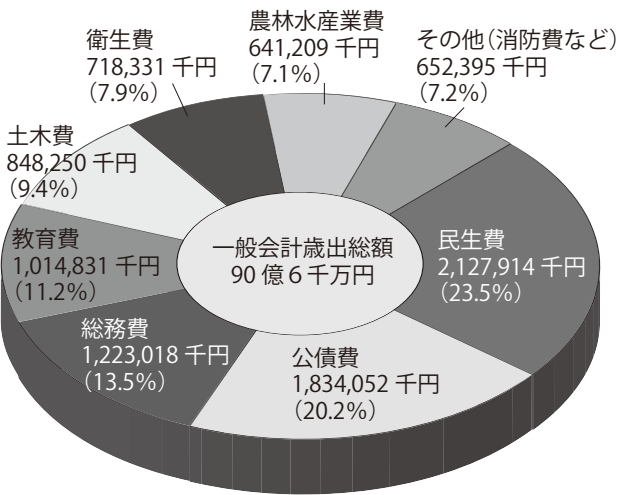
資料：産業建設課 環境整備班

■平成 21 年度会計別予算額

[単位：円]

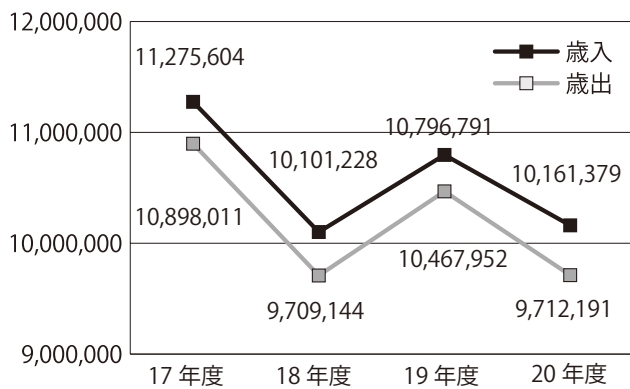
	当初予算額	前年度比
一般会計	9,060,000,000	△ 3.0%
特別会計	5,303,625,000	△ 13.3%
企業会計	141,105,000	△ 8.1%
合 計	14,504,730,000	△ 7.1%

■平成 21 年度一般会計当初予算(歳出) 目的別

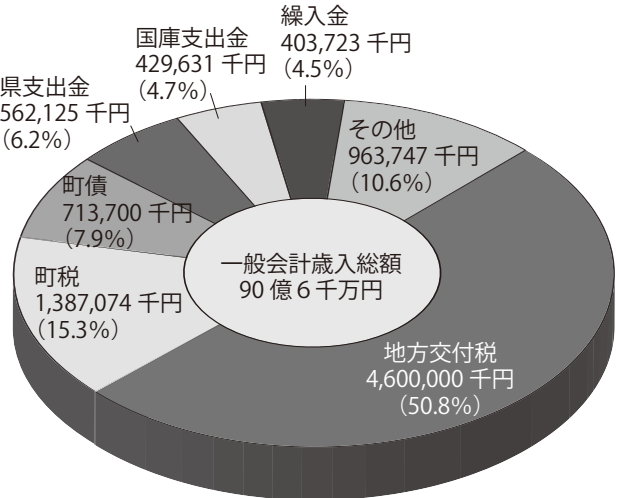


■一般会計決算の推移

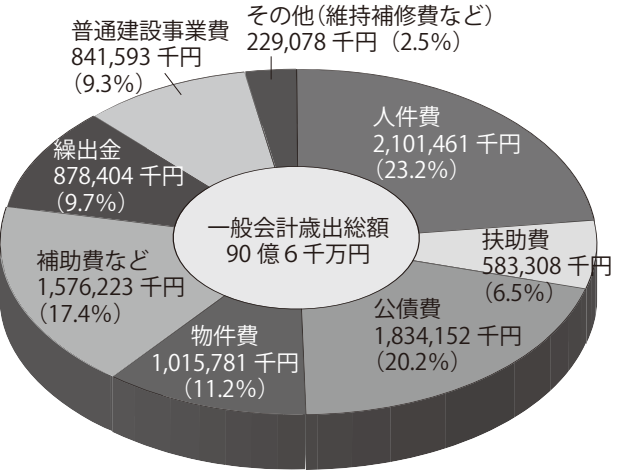
[単位：千円]



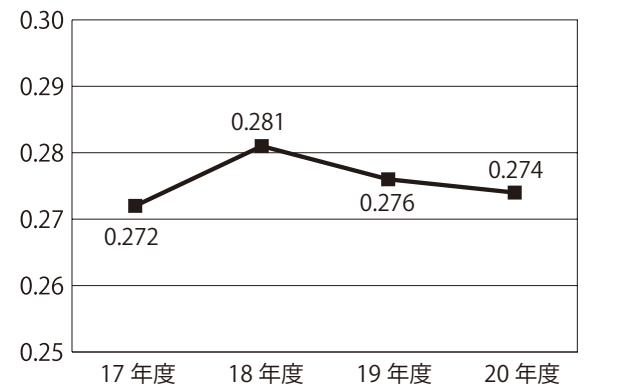
■平成 21 年度一般会計当初予算 (歳入)



■平成 21 年度一般会計当初予算(歳出) 性質別



■財政力指数の推移



資料：総務課 行政財政班

■小学校児童数

[21 年 5 月 1 日現在、単位：人]

	H17	H18	H19	H20	H21
内子小学校	398	396	382	385	397
大瀬小学校	87	75	64	66	57
程内小学校	10	9	11	9	7
立川小学校	76	71	70	67	59
石畳小学校	10	12	10	11	11
御祓小学校	17	19	20	22	21
天神小学校	219	215	215	217	211
五十崎小学校	122	111	110	110	107
参川小学校	58	49	46	38	37
小田小学校	71	65	56	55	51
田渡小学校	30	22	20	17	16
計	1,098	1,044	1,004	997	974

■小学校学年別児童数

[21 年 5 月 1 日現在、単位：人]

学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
人数	150	173	153	142	179	177	974

■幼稚園年齢別園児数

[21 年 5 月 1 日現在、単位：人]

	3 歳児	4 歳児	5 歳児	計
内子幼稚園	26	35	27	88
立川幼稚園	5	6	8	19
五十崎幼稚園	12	17	25	54
参川幼稚園	0	7	5	12
小田幼稚園	3	11	3	17
計	46	76	68	190

資料：教育課 学校教育班

■国選定および指定文化財

種類	名称	所在地	所有者（管理者）	指定年月日
重要伝統的建造物群保存地区	内子町八日市護国伝統的建造物群保存地区	内子	内子町・関係地主	国選定 S 57.4.17
重要文化財	上芳我家	内子	関係地主	H 2.7.20
重要文化財	本芳我家	内子	関係地主	H 2.7.20
重要文化財	大村家	内子	関係地主	H 2.7.20
重要有形民俗文化財	内子および周辺地域の精蠟用具（1,444 点）	内子	内子町	H 3.3.22

■登録有形文化財（国）

名称	所在地	指定年月日
都築酒店店舗および主屋	町村	H 15.1.31
論田の西井出堰	論田	H 18.10.18
上田家石垣	袋口	H 18.10.18
旧下芳我家住宅主屋	内子	H 19.7.31
旧下芳我家住宅隠居屋	内子	H 19.7.31

■中学校生徒数

[21 年 5 月 1 日現在、単位：人]

	H17	H18	H19	H20	H21
内子中学校	273	254	257	242	247
大瀬中学校	65	70	61	53	49
五十崎中学校	199	201	177	173	171
小田中学校	94	99	97	90	73
計	631	624	592	558	540

■中学校学年別生徒数

[21 年 5 月 1 日現在、単位：人]

学年	1 年	2 年	3 年	計
人数	177	180	183	540

■道路整備状況

[20 年 4 月 1 日現在、単位：km・％]

		路線数	総延長	実延長	改良済延長	改良率	舗装済延長	舗装率
国	道	3	67,671	48,248	39,593	82.1	48,123	99.7
県	主要地方道	6	74,246	73,210	37,132	50.7	73,210	100.0
道	一般県道	17	171,509	159,333	58,937	37.0	148,001	92.9

[21 年 4 月 1 日現在、単位：km・％]

町	道	840	594.0	584.1	246.4	42.2	398.5	68.3
---	---	-----	-------	-------	-------	------	-------	------

資料：産業建設課 建設デザイン班

■火災発生状況

[単位：件]

	建物	林野	車両	その他	合計
17 年	8	4	1	2	15
18 年	2	1	0	6	9
19 年	4	0	1	1	6
20 年	4	0	1	2	7
21 年	5	3	0	2	10

■救急出動件数

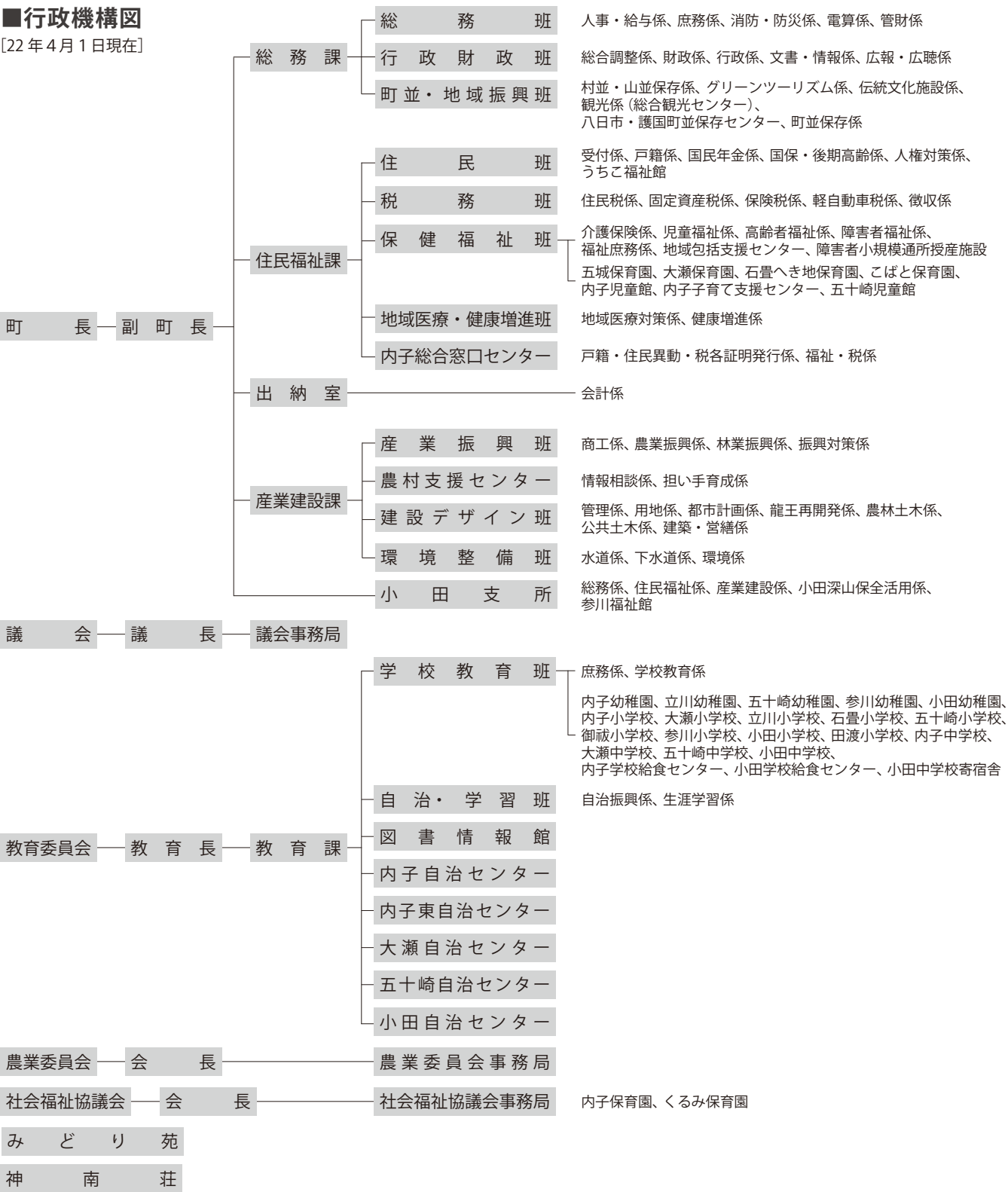
[単位：件]

	地区	区分	救急事故種別											計
			急病	交通事故	一般負傷	自損行為	労働災害	運動競技	加害	火災	水難	転院搬送	その他	
17 年	内子	件数	236	42	60	10	7	5	1	1	0	45	1	408
		搬送人員	223	52	56	7	7	5	1	1	0	45	0	397
	五十崎	件数	85	17	23	2	2	0	0	1	0	17	1	148
		搬送人員	82	20	21	2	2	0	0	1	0	17	1	146
	小田	件数	63	7	31	1	3	1	0	2	0	8	0	116
		搬送人員	59	6	29	0	3	2	0	1	0	8	0	108
18 年	内子	件数	229	39	53	11	6	6	2	0	0	42	1	389
		搬送人員	226	40	49	7	6	6	2	0	0	42	2	380
	五十崎	件数	90	15	22	2	0	0	0	2	0	11	2	144
		搬送人員	90	21	21	1	0	0	0	3	0	11	2	149
	小田	件数	86	8	20	2	3	3	1	0	0	8	1	132
		搬送人員	76	11	20	1	3	3	1	0	0	8	0	123
19 年	内子	件数	302	42	64	4	4	2	1	0	0	26	0	445
		搬送人員	285	39	60	3	3	2	1	0	0	26	0	419
	五十崎	件数	118	29	22	3	1	4	0	0	0	13	0	190
		搬送人員	113	34	20	2	1	5	0	0	0	13	0	188
	小田	件数	58	6	32	3	3	1	1	0	0	7	0	111
		搬送人員	51	10	30	1	2	1	1	0	0	7	0	103
20 年	内子	件数	271	48	73	7	4	3	0	1	0	22	2	431
		搬送人員	254	54	74	5	4	3	0	1	0	22	0	417
	五十崎	件数	116	12	21	0	0	1	3	0	0	8	0	161
		搬送人員	108	12	21	0	0	1	3	0	0	8	0	153
	小田	件数	70	7	36	0	5	0	1	0	0	5	1	125
		搬送人員	63	9	33	0	5	0	1	0	0	5	0	116
21 年	内子	件数	280	46	69	12	2	6	0	0	2	20	1	438
		搬送人員	264	50	66	9	2	6	0	0	2	20	2	421
	五十崎	件数	115	11	23	1	3	0	0	0	1	13	1	168
		搬送人員	108	17	21	0	3	0	0	0	0	13	0	162
	小田	件数	68	6	23	2	4	4	0	0	0	5	0	112
		搬送人員	67	5	22	0	4	4	0	0	0	5	0	107

資料：大洲消防内子支署

■行政機構図

[22年4月1日現在]



■歴代町長

氏名	就任年月日	退任年月日
河内 紘一 こういち ひとし	平成 17 年 2 月 6 日	平成 21 年 2 月 5 日
稲本 隆壽 たかとし しのぶ	平成 21 年 2 月 6 日	

■歴代町議会議員

氏名	就任年月日	退任年月日
武知 正照 まさてる たいち	平成 17 年 1 月 13 日	平成 19 年 5 月 10 日
山田 博文 ひろみ やまだ	平成 19 年 5 月 10 日	平成 21 年 4 月 14 日
山崎 正史 まさし やまざき	平成 21 年 5 月 14 日	



内子町勢要覧 2010

- 発行日 平成 22 年 3 月 31 日
- 発行 愛媛県内子町
- 編集 内子町役場 総務課
行政財政班 広報・広聴係
- 印刷製本 岡田印刷株式会社